

## 資料

## そのたびごとに単独の経験を何度も問い直すこと

——ジャン＝ミシェル・レイ氏との対話——

ジャン＝ミシェル・レイ  
聞き手・翻訳：細貝健司

## はじめに

以下に掲げるのは、2009年3月13日に行われたジャン＝ミシェル・レイ氏へのインタビュー、より正確には、録音されたインタビューを文字で起こしたものにレイ氏自らが加筆したものの全訳である。インタビューは、パリのレイ氏の仕事場で、私（細貝）ひとりに対話者に行われ、収録は2時間に及んだ。

ジャン＝ミシェル・レイ氏は1942年生まれ、パリ第8大学名誉教授である。その専門領域は、哲学、文学、精神分析、美学と幅広い。ニーチェとフロイトを斬新な観点から分析した『記号の賭け *L'Enjeu des signes*』、『フロイトの行程 *Le Parcours de Freud*』が初期を飾る重要な作品であるが、そこから現在までの10冊余の著書の対象も、ニーチェ、フロイトのみならず、バタイユ、アルトー、カフカ、ペギー、ヴァレリーなどと幅広い。そのアプローチは、常に、作品をその「言語」の作用そのものから読み解くものであり、文学、哲学という既存の領域に囚われない独自の視点を読者に提供する<sup>1)</sup>。

レイ氏が、大学教員としてのキャリアを、創設後間もないパリ第8大学で、ミシェル・フーコーと共同の講義により開始したことは、ほとんど知られていない。また、ジョルジュ・バタイユの秘密結社「アセファル」<sup>2)</sup>に関わっていたジョルジュ・アンブロジーノが、1960年代に研究会を主催していたこと、そこに多くの名だたる知識人が集い、その中にレイ氏も含まれていたことも、ほとんど知られていない事実である。その事実の一端を偶然聞かされたのは、2007年、早稲田大学での国際シンポジウム参加のために来日していたレイ氏を、京都へ案内する新幹線の車中であつた。その事実は、レイ氏の思想的背景ならびにアセファルを巡る事実関係に対して、一定以上の理解があると自負していた私（『聖なる陰謀』という、アセファルを巡る歴史的な資料の翻訳チームにも加わった経験がある）の、その自信の基盤を根底から揺るがすものであつた（ただし、この会の存在自体は、上記『聖なる陰謀』でも言及されている）。レイ氏の帰国後、開示された事実を改めて思い返し、このような思想的に重要なできごとが、個人の記憶の奥深くで、個的生命の命運と共に消失してしまう可能性に、愛惜の念を禁じ得なかつた。そこで、改めてレイ氏の話聞き、自らが進めていた研究と絡め、きちんとした形で記録に残すべく、2009年、自らパリに赴くに至つた。

インタビューの基本テーマは、当初、私の研究対象——ジュルジュ・バタイユを中心とした1930年代のフランスの知的共同体の動勢——の絡みから、1930年代のフランスの知的共同体の残響が、1960年代のパリの知的領域にまで残っていたか、そうだとすると、どのような形で続いていたのかを探ることにあつた。ところが、レイ氏の話は、そのような安易な舞台設定を大きく逸脱する豊穡なものであり、時代を代表する知識人たちとの無媒な生の絡み合いを現実に生きた者の証言として、1960年代のある時期のパリの知的活動の一断面を鮮烈に描き出すものであつた。よつて、このインタビューは、一人の若者が、1960年代のパリでの知的格闘を通じ、一人の研究者として醸成される過程を辿る試みであると共に、レイ氏という存在自身に、フランス知的共同体という実存の一つのリミットを見る体験でもあつた。

文学・思想研究というのは、対象から離脱しては成り立たない。私の博士論文の指導者でもあつたレイ氏が折に触れ私に語つた言葉である。私はそれを、文献を私心なく読むことの意にのみ解していたが、もしや別の含意もあつたのかもしれぬと思ひ直す契機となる体験であつた。

なお、本インタビューとその翻訳、包括は、日本学術振興会の科研費（若手研究スタートアップ）の補助を受けた「30年代フランスの『ユニヴェルセルなシステム』理論の受容と現代における有効性」というテーマの研究の成果の一部であることを申し添えておきたい。

### 1960年代のフランスの大学とニーチェ

**細貝健司** まず、文学と哲学について、あなたがこれまでどのような道のりを辿つていらつたかをお話いただけますか。

**ジャン＝ミシェル・レイ** 私の文学と哲学の道のりは、基本的にはソルボンヌでの研究に始まります。1960年からの哲学研究です。それ以前、まだ私がリセの学生だつた頃、メルロ＝ポンティの講義に出ていました。メルロ＝ポンティの講義には2年間出ました。大学生になつてからも出続けたので、ソルボンヌでは哲学科に進みました。そこで興味深かつたのは、当時助手をしていた人たちです。それらはデリダやブルデューといった人たちであり、彼らは極めて興味深い仕事をしていました。ブルデューは人類学の歴史について、デリダは哲学の古典について仕事をしていました。そこで、私は、多くの読書を通じて哲学を研究し、平行して、文学の本も沢山読みました。哲学の学部を卒業した後、直ぐに私は、博士論文（当時は第三課程博士論文と呼ばれていました）に取りかかり、リクールの指導の元、ニーチェについての博士論文を書き上げました。それは私の初めての本となり、1971年、スイユ社から『記号の賭け *L'Enjeu des signes*』というタイトルで出版されました。

**細貝** なぜあなたは一般的な哲学ではなく、個々の哲学者、とくにニーチェとフロイトについて研究しようとしたのですか。

**レイ** 特定の作家について研究をしようと決める理由など、誰にとつても始めはよく分かりませんよ。当時、ニーチェについての研究は、相対的にごくわずかで、少なくともフランスではそうでした。特筆すべきはドゥルーズの仕事であり、当時としては最も重要なものと私には映りました。ニーチェには言語に関する一種の深い考察があると私は考え、それに先ず私は惹かれ

ました。よって、私が興味を持ったものは、もちろんニーチェのテキストですが、同時に、言語に繋がるあらゆる問題でした。それゆえ、私はニーチェにおける記号の問題について研究をしたのです。私は4年間その博士論文に打ち込み、少々ドイツ語も覚えました。もちろんニーチェを原文から読まねばなりませんでしたが、当時、フランス語訳はひどいもので、とにかく非常に不明瞭、文学的ではあるのですが、極めて不明瞭でしたから（それはアンリ・アルベール<sup>3)</sup>という人の手による古い翻訳でした。だいたい1910年から1920年頃になされた古い翻訳で、良く書けてはいるのですが、極めて不明確でした。その翻訳では、ニーチェのものである概念が何なのか見えてきませんでした）。ですから、出来る限りテキストの細部に注意を向けるのはもちろんですが、ニーチェのような（あるいはフロイトのような）作家について研究をするときは、翻訳ではなく、原テキストに当たることも必要だと私は思います。ですから、そういうわけで、原テキストに基づいて研究するために、少々のドイツ語を一種の必要な予備知識として学習しなくてはなりません。そこからフロイトや、彼のエクリチュール、とりわけ彼の概念体系について、引き続き研究することが可能になりました。

**細貝** あなたが青春時代を過ごされた1960年代のフランスの大学では、ニーチェに対する一種の過小評価がありませんでしたか。

**レイ** ありました。つまり、ニーチェはよく知られておらず、しばしば性急な、暗示的なやり方で捉えられていました。研究は幾つかありましたが、面白いものはそれほどありませんでした。

**細貝** フランス人がニーチェを誤解した一番の理由は何だとお考えですか。

**レイ** 難しいですね。ニーチェについての知識というのは、基本的に文学を経由してフランスに来ていましたから。例えば、20世紀の初めにはジッドのような人たちを経由していました。ですから、ニーチェは非常に文学的で、けれどもある面では少々アカデミックだというような考えがいつでも少々ありましたね。それで大学ですが、当時の大学は少々硬直化していて、ニーチェに興味のある人などほとんどいませんでした。リクールは、とにかく教員としては、ニーチェについてのこの研究を直ぐに受け入れてくれるような類の人でした。それに、同じような方向で少し研究をしている人も複数いました。ですから、それは全く面白い実習となったわけです。同時に、リクールのセミナーもあり、そこは、極めて有益な意見交換の場でした。というのも、そこでは、同時にメルロ＝ポンティ、ハイデッガー、フッサールなどに関する考察が行われていたからです。しかし、リクールは同時に、アングロサクソンの哲学、特にヴィットゲンシュタインについて興味を持ち始めていました。よって、当時の私たちのような学生は、それまでの研究を通じて近づくことの出来なかった、哲学文化の全面を発見する幸運を得たのです。リクールは、少なくとも私の世代にとって、渡し守、主導者という非常に重要な役割を果たしたと思います。彼は1960年代の終わり頃、私たちに数多くの重要なことを、しかも大変に慎み深いやり方で、気づかせてくれました。そして彼は同じ時期に、フロイトにも興味を持っていました。

**細貝** あなたのフロイトに対する興味は、ニーチェについての仕事の延長と考えて良いのですか。

**レイ** ええ、ニーチェについての仕事を、1970年に実際に終了し、私はフロイトをドイツ語で読み始めました。ニーチェについての博士論文の後直ちに始めたのです。それは明らかにニーチェとは異なると私も思いましたから、一緒にしてはなりません、対立する訳でもないように

も見えました（どちらも明快でたいへん品のあるドイツ語を用いる上に、よく知られていることですが、フロイトはニーチェの作品に親しんでおり、それを——影響されないよう、距離を置いて読むように心がけながら——何度も引用しています）。ですから、私の興味は、基本的には、フロイトのエクリチュールについて、彼が問題を定式化するその手口について、諸概念について、フロイトの隠喩について、そして、当時、これまたそれほど研究されておらず、それほど多くの研究者の関心を引いていなかった一連のことがらについて研究することでした。そういうわけで、私の興味は、ニーチェに対して向かっていたのと同じようなところに向かいました。それはすなわち、もちろん先ずは言語に力点を置く思考スタイルに対してであり、次いで、極めて独自であると見えたとあるタイプの考え、つまり、はっきり哲学的というのではなく、科学的でもなく、極めて多様な情報源から形成されている考えに重きを置く思考スタイルに対してでした。それこそ私が本当に興味を持ったところであり、その興味のもと、私は独学でフロイトのテキストに取り組み、フロイトに関する幾つかの研究——主にラカンでした——も読み始めました。そして、私は幾つか論文を書こうと試み、それらは後に書籍となりました。しかし、実際、それはある思考スタイルについて考察する時間であり、その思考スタイルはさまざまな問いを提示しました。「何が代表的なフロイトの思考スタイルか」「それをどのように記述できるか」「それが今日どのような意味を持ちうるか」「そのような思考スタイルはどれほど言語といつも強く結びついているか」「そのような寄与にどのように対応したらよいか」などです。また同種の問いが他にも生じました。この研究を通じて、私は様々な精神分析家と知り合い、その後、彼らのある者と一緒に仕事をするようになりました。

### 「物質」と「信用（取引）」

細貝 私の印象では、あなたの興味は言語と言語の外との領界を同定することにあると思います。

あなたの著作から読み取れる世界のイメージは、言語の外部にはもはや言葉や思考に取り込めるものは何もなく、ただ「物質」としか呼びよめない何かがあるだけというものです。

レイ 様々な作者について仕事を先ず行い、さらに私たちの母国語でない言語について仕事をすると、ものごとをちょっと特異に眺めることになります。ですから、先ずはニーチェの中に、それから——その時はたぶんもう少し理論武装が出来ていましたが——フロイトの中に私が興味を持ったのは、どれほど或ることばが——私はこのように幾つかの言葉に目印を付けるのですが——、どれほどに或る言葉が意味を持ち、また、理論が構築され、練り上げられる中で、非常に強い立場を占めるようになるのか、を捉えることでありました。「物質」という言葉もそうですし、フロイトについて書いた『作用することば *Des Mots à l'œuvre*』という本で考察を試みた言葉もそうです。その本の中で、私はドイツ語の《übersehen》という動詞を取り上げました。その言葉は、「全体を概観する」「全体の状況を鳥瞰する」という意味と、「見落とす」「見逃す」という意味を同時に持ちます。つまり、ほぼ正反対の意味を持つわけです。そこで私が興味を持ったのは、そこからある仮説を立てることです。つまり、どれほどそのように重要な語が、フロイトの思考スタイルをよりよく理解する助けとなるか——というのも、

それはドイツ語で日常的に使われる語で、フロイトによって練り上げられた概念では全くないからです——を観察することでした。それはまったくありきたりの語ですが、二重の意味を持ち、矛盾するような何かを含むという重要性を持った語です。その意味は言ってみれば文脈によって決まるのです。

**細貝** その矛盾こそが構築や練り上げを可能にするのではありませんか。実際、そのようなヴィジョンはあなたの著作に常に見られます。例えば、『信用の時間』の中で展開された「信用（取引）credit」という概念も同様な矛盾に刻印されています。金融・貨幣システムの中で、一見するに「信用」の入る隙間もないようですが、実際はこのシステムは「信用」によって支えられています。だから、そのシステムはシステムの中にない何かによって支えられているのです。

**レイ** ええ、ある意味ではそうです。「信用（取引）」の中で私が興味を持ったこと、それはまず、「信用（取引）」があらゆる観点から見て、もちろん経済的な観点からだけでなく、あらゆる観点から見て最も重要な問題だと私が思ったということです。それは「信用」や「信頼」などのような語あるいは一連の語に絡みつくかもしれない問題だと思ったのです。それから、一つの歴史に関連する問題だとも感じました。歴史を一顧だにせず研究することはできないと、歴史を完全に除外してしまうことは無理だという思いがますます強くなりました。私は歴史家でも社会学者でもありませんから、それらの領域について全く無能です。ですが、ある任意の時期に提示され、一般的な文脈において、とてつもない重要性を帯びた幾つかの問題があるように私は思いました。よって信用（取引）の歴史とは、何よりも貨幣価値の下落、フランスの財政を数十年に渡る破滅へと導いた1720年の例の破産に関わるフランス的な問題でした。さらに、そのような観点以外にも、19世紀の間中、フランスのみでなく、イギリスに於いても、あらゆる領域で、信用（取引）の操作のことを絶えず考察していたという事実——それは私にとって中心となる事実です——があります。実際、「信用（取引）」という語が意味しうるのは、非常に大きな地盤を持った何か、もちろん経済と関連しますが、同時に、或るやり方でモラルや政治、文学と関連する何かであり、それは日々研究を新たにしていなくてはならない観念なのだという印象を私はますます強く抱くようになりました。ですから、それは非常に広い関与性を持ち、歴史的観点だけに留まらない何かだったのです。そこで、特に、信頼、信頼すること、信頼させること等の領域全体についての疑問が生じます。その疑問は多様な分野において生じるのです。そこでついに、私にとって新しいことがら、つまり、厳密に限定された特殊な分野でなく、そこに孕まれている危険と共に研究を試みなくてはならない分野に身を置いたのです。だから、私は複数の分野の界面で、異なる領域、すなわち経済領域、政治領域、哲学領域、文学領域、精神分析学領域などの間に関係を打ち立てようとしながら仕事をしたのです。そのように仕事を進めることが必要であり、私は一つの領域に閉じこもっていられず、興味の赴くまま、むしろ領域相互が関係し、そもそも境界を共有しない領域同士が交差するのを見ることにますます自分の関心が向かっているのを感じました。結局、私が興味を惹かれたのは、学際性ではなく、むしろ、異なる分野間の関係やそれらの限界について研究することであり、それらの分野がどれほど互いを浸食し合い、絶えず介入し合っているかを知ろうとすることでした。「信用（取引）」の問題は、特別にそのようなアプローチに適しており、それを必要とさえしま

した。もし厳密に経済的な領域に留まるならば、何が起きているか、何が起これ続けているかについて殆ど何も分からないでしょう。

**細貝** ここまでのところで私が分かったことを整理すれば、あなたの興味は、明示されないやり方でシステムを可能にしている何かを明るみに出すことにいつも向かっているのですね。たとえば、市場経済の中にいると、経済システムの基盤を担っているのは貨幣であると考えがちです。しかし、システムを支えているのは、システムの中に含まれない何か、システムの中に片足だけ突っ込み、もう片足は外に出している何かなのです。その何かをあなたは「信用（取引）」と呼んだのですね。

**レイ** ええ、「信用（取引）」というのは多彩な面を持ち、そのうちの一つに決して帰着しない何かです。破産の歴史は経済についてだけでなく、政治についても沢山のことを教えてくれると思います。それは思索を促す出来事であり、その出来事が信用（取引）を、少なくともその多彩な面のどれかを、暴き立てる限りにおいてそうであります。というのも、信用（取引）とは、実際、よく知られた経済のメカニズムですが、同時に、信頼に基づく何かです。よってそれは極めて物質的な帰結を持った、全く非物質的な何かなのです。現在の危機の中で、人々がどれほど絶えず信頼に頼っているかが分かります。ですから、興味深いのはきっとその点です。つまり、絶えず二重化されるある語です。18世紀にフランスが大危機に陥り、財政が崩壊しそうになったとき、次のようなことを人々は絶えず口にしていました「財政上の物質的信用を得るためには、精神的な信用を得なくてはならない」。換言すれば、その語は多面性を持っているということです。実際、よく知られた経済的なメカニズムがあり、また、精神的な信用、政治的な信用、それに類する何か、つまり、実際には全く別の性質をもち、あなたが言うように、或る意味では、システムの外部にある何かがあるのです。そこは、同じ一つの語あるいは同じ複数の語を介し、その外部性、そして、外部にあるものとシステムの機能との関係に関わる非常に重要な何かがあります。それこそが私には興味深く思え、今日的な意義を常にもつのです。

### 60年代のバタイユとアンブロジーノの研究会

**細貝** 先ほど、フランスでのニーチェ受容の第一期で、ニーチェが偏った理解をされていたという話題になりましたが、バタイユの受容に際しても、ほぼ同じような反応があったといえるのではないのでしょうか。その中で、あなたはバタイユの仕事を再評価した先駆者の一人です。バタイユとどのように出会ったかについてお話しただけませんか。

**レイ** バタイユとの出会いはほぼ偶然の産物でした。バタイユの名は広まっていたのですが、実際はほとんど知られていませんでした。1960年代の終わり——60年に私は18歳でした——に、哲学科の学生の間でも、それは耳にしたことがあるものの、実際にはほとんど知られていない名前でした。そして、ある本を巡って、難解で、ちょっと秘密めいていて、近づきがたく、危険であるというようなちょっとした伝説ができていました。ですからそれはその当時に私が発見した何かなのです。逸話ですが、ソルボンヌの哲学科の学生の中に——ソルボンヌは当時小さな社会でした。というのも、パリには哲学科は一つだけで、それがソルボンヌにあったので

す（後に分裂しましたが）——、ともかくソルボンヌの哲学科の私の世代の学生の中に、バタイユの娘である若い女性がいて、それがジュディット・ミレー<sup>4)</sup>でした。実際にはラカンの娘でしたが、それは取るに足らぬことです。家庭の事情などがあり、当時彼女はバタイユと称していたのです。当時のそんなちょっとした伝説もあって、手に入るものを読み始め、当時入手可能なものを購入したのです。それは私の目には非常に興味深くもあり、非常に難解でもある作品でした。たしか『内的体験』から読み始めたと思いますが、まだ旧版の『内的体験』でした。それは理解可能とも困難とも見えました。つまり、何か奇妙なものがあったのです。というのも、一見すると、例えば哲学テキストなどと比べればそう難解ではないけれど、その見かけ上の易しさを越えた何かがあるように感じられたのです。そこで、私はバタイユを読み始め、当時講読可能な全てを見つけようと思いました。といっても、それほど大量にあるわけでもなかったのです。それから、正確には覚えていませんが、66年か67年頃に、バタイユ全集の刊行に参加しないかとの打診があり、2冊を編集することになっていたのです。しかし、様々な理由のため、その編集をすることが出来なくなりました。正確に言えば、その仕事をするのを断ったのです。それでも、バタイユを読み続けました。

細貝 しかし、全集の第1巻では、ミシェル・フーコーが編集へのあなたの参加を予告していますね。

レイ ガリマル社との契約の問題でした。フーコーは編集作業を引き受けてはいませんでした。若者たちのグループが編集をしていたのです。第一にドゥニ・オリエ<sup>5)</sup>がいて、タデ・クロソウスキー<sup>6)</sup>がいて、数人のグループがありました。フーコーは単に一種の序文を書く契約をしただけです。というのも、ガリマルにとって、フーコーは非常な有名者でしたから、それはその版の販売促進の一つのやり方でした。ただし、言ってみれば、フーコーは具体的な編集には参加していませんでした。彼はご存じの通り、バタイユについての論文を書いたのです。それで、私はもう少し本を見つけようと試み、そこで、ええと、いまお話しすべきかどうか分かりませんが、1965年に、バタイユを知っていたという人々と出会ったのです。たぶん65年の始めだと思いますが、ある人の紹介で、全く偶然に、哲学に携わっており、毎週自主的にセミナーを開催している人々のグループと関わるようになったのです。私はまだ哲学科の学生でした。それは、正確には分かりませんが、たしか15年ほど続いているグループで、戦後は、ああそうです、65年は戦後20年ですから、そのグループは50年代に出来たに違いありません。それはジョルジュ・アンブロジオーノによって統率され、運営されているグループで、アンブロジオーノはバタイユととても近く、物理学者でしたが、その仕事は大変バタイユの興味を惹き、バタイユはその仕事に親しみ、『呪われた部分』の中でアンブロジオーノの研究の幾つかを引用しました。ですから、それは基本的に、30年代に青春を過ごし、バタイユと非常に近かった人々により構成されていて、その中でアンブロジオーノが一番有名でした。ただし、他にも数学者がいたり、ドイツ語翻訳者、それもマックス・ウェーバー<sup>7)</sup>の翻訳者——良質の翻訳者でした——がいたり、分けても、ガストン＝ルイ・ルウ<sup>7)</sup>という名の画家がいました。このような小さな社会の中に、あらゆる種類の人々や、やや年少の人々がいました。哲学の専門家も何人かいて、中でも、ヘーゲルの研究者で、ヘーゲルについての研究書を2冊出版していたウージェーヌ・フレッシュマンという人がおり、また、私と同世代のより若い人々がいました。彼らの原則は、

毎年、基本的には土曜の夜、メンバーの誰かの家に集まり、一つの哲学テキストについて、1年間勉強するというものでした。<sup>8)</sup>それはスピノザだったり、ヘーゲルだったり、つまり、全く種類の違うテキストでした。医者も何人かいましたし、判事もいました。それらの人々の大多数は哲学の素養がありませんでした。ですから、それは、その構成において極めて雑多で多様であり、人々は大変気さくで友好的でした。アンブロジーノと彼の妻は金曜日の夜になると、フランス語で言う「table ouverte だれかれとなくもてなす」ということをやっていました。つまり、来たい人は予告無しに来てよいので、常に友達が来ていました。非常に心地よく、気さくで、澁刺としたものがありました。そのセミナーに私は数年間通いました。

**細貝** そのセミナーでは具体的にどんな活動が行われていたのですか。テキストを読むのですか。

**レイ** テキストを読むのです。扱っているテキストの一部を毎週誰かが担当しました。参加者の大部分は哲学の専門家ではありませんが、それらはどちらかというとな難解なテキスト、概して難解なテキストでした。というのも、スピノザの『エチカ』やヘーゲルの『大論理学』のような、単純とはほど遠いテキストでしたから。そのセミナーの或るメンバーはバタイユのことをよく知っていましたが、他の人は知りませんでした。しかし、セミナーの会合では、バタイユのことが語られることはほとんどありませんでした。ラカンがその数年前に来ていましたが、ぼつんぼつんと来ていたに過ぎません。それからそのグループに彫刻家アルベルト・ジャコメッティの弟ディエゴ<sup>9)</sup>が時々来ていました。彼も彫刻を造っており、兄と共に仕事をしていました。彼はディエゴという名でした。それは極めて興味深く、多様なグループで、とても驚くようなことがありました。驚くことがあったというのは、大部分が哲学の専門家でないのに、そこで語られることに興味を持っていたからです。ですから、そこでは様々なレベルの議論が行われました。その時に、私はアンブロジーノと出会い、意気投合したのです。当時その人は60歳くらい、きっと55歳だったと思います。私は彼と直ちに意気投合しました。彼はバタイユの本のために描かれたフォートリエ<sup>10)</sup>の小さな2枚のイラストを私にくれました。私は彼とバタイユについて、また、バタイユについて彼が知ることについて、大いに議論しました。しかし、同時にそれらの人々の心の中に、分けてもアンブロジーノ——私の意見では、彼が一番興味深いと思います。というのも、彼が最も好奇心旺盛だったからです——の心の中には、少なくともその当時、バタイユに対して、拒絶というわけではありませんが、とても冷ややかな何かがありました。まるで、彼らにとって非常に強烈で、大切な何かを生き、と同時に、彼らはそこから少し身を遠ざけているかのようでした。ですから、それは矛盾した態度に表れました。アンブロジーノとの議論は少々奇妙でした。というのも、彼はバタイユのことは殆ど語りませんでしたから。少なくとも当時、彼は基本的にバタイユに対し少々否定的なヴィジョンを持っていたと思います。この傾向は政治に関する問題になるとますます激しくなっていたと思います。というのも、それらの人々は全て、戦前も戦中も、進歩主義者でしたが、簡単に言うと、戦後、60年代に段々といわば反動主義者になっていったからです。よって、彼らは気安く、感じがよいと形容できる人々ですが、それらの問題全体については少々びりびりしたところがあったのです。

**細貝** 私はアンブロジーノがグループを作ろうと思った経緯に興味があります。だって、彼はアセファルの活動の、つまり失敗したバタイユのグループ活動のただ中に居たわけではありませ

んか。

レイ そうですね。ですが、彼はそれについては決して語りませんでした。私もそれについて彼に質問をしてみました。彼は決して語りませんでした。決してね。私が質問を試みたのは、当時本当にそれに興味があったからですが、アンブロジーノは、どんなことであれ語りませんでした。明らかに彼はその逸話については話したくない様子でしたが、それだけでなく、その逸話についての興味をもはや失っているのだと私は感じました。彼はきつと非常に熱狂的で、もちろん同時に非常に独特な瞬間を生き、戦後、それら全てのことに對し、全く拒絶するスタンスというのではないけれど——実際、正確にはそうではありませんから——、大変否定的なスタンスと、冷やかかで、同時に、どうでしょう、ちょっと窮屈だといったスタンスを取っていたようでした。彼は私に對し親しみを感じてくれていたと思います。私の記憶の中でもその印象だけが大きく残っていますが、そうやって互いに親しみを感じていたにも拘わらず、彼は決して例のことについて語りませんでした。そして、彼がバタイユについて語っても、いつも少々皮肉っぽく、これまた冷やかかな語り口でした。私が思うに、たぶんそれは、彼に取って苦痛を伴うような何かだったのではないのでしょうか。確信はありませんが、いずれにせよ、他のメンバーも同様でした。他のメンバーはバタイユとのあらゆる物語に彼ほど関わり合っていないと思います。シュノン<sup>11)</sup>という名の数学者もいました。ジャック・シャヴィ<sup>12)</sup>という名のドイツ語の翻訳家、マックス・ウェーバーなどの翻訳をした、とても良い翻訳家もいましたが、もう随分前に亡くなりました。彼はこの近所に住んでいたのですよ。その後しばらくはよく会いましたが、3、4年ほど前に亡くなりました。いずれにせよ、他の人々もバタイユとの関係については何も語りませんでした。それは、本当に過去のことであり、彼らはそこへ戻りたいとは微塵も思っていないのです。彼らは若者の時、その物語の全体に魅惑されましたが、その当時は、その過去と、遙かに冷やかかな関係を結んでいました。一方、アンブロジーノは、私が思うに、バタイユとの関係はもっと濃密であり、彼がそれについて語るのを避けようとしている様子は、他の人々に増して明らかでした。

細貝 マリナ・ガレット<sup>13)</sup>編の『魔法使いの弟子』が刊行され、アセファルのグループ内で行われていたことが段々明らかになってきました。その活動はむしろ宗教や秘教の実践へと向けられていたようです。

レイ あなたは人身の供犠の話話を話題にしているのですか。それが本当だったのかどうか私には分かりません。それがゲームだったのかも見当がつかいません。先ほどお話ししたように、明らかにアンブロジーノは、それらの逸話について、正確には、バタイユについてさえ、絶対に語ろうとしませんでしたから、もう彼はそのことについて興味がなかったのだと思います。それが感じられましたし、それが分かりましたから。最初の頃は質問もしましたが、止めました。無駄だと分かったからです。私がバタイユの著作を話題にすると、時としてアンブロジーノは不快感や、それに類するものを示しました。時には皮肉めいたものが浮かびました。あたかも、それら全ては自分にとってもう殆ど何の意味もないと言わんばかりに。あるいはそれは、彼がもう語りたくないものと距離を置くためのユーモア——彼はユーモアを忘れたことがありませんから——だったのかもしれない。

細貝 しかし、アンブロジーノがシュノンやシャヴィと行った活動は、アセファルというグルー

プの活動と、どちらもグループという形態の元で展開されたという意味で、同じような方向を目指しているとは言えませんか。

レイ ええ、形態という観点からすればそうですね。ただ、アンブロジーノのグループはずっと穏やかで、言ってみればずっと学術的でした。そうです、ほとんど学術的と言っても良いでしょう。それはいずれにせよ真面目で、枠組みがありました。彼らにとって、それは友好的かつ知的な活動を維持する一つのやり方だったのです。そのグループにはそもそも明らかに友好的な次元がありました。それから、その活動には、難解な哲学テキスト（ヘーゲル、スピノザ、プラトンなどでした）を、それを全く職業とはしておらず、関心もない人々に理解させようとする刺激剤のような何かがありました。ですから、それはアセファルとは全く種類の異なるグループであったと思います。アセファルのグループが実際にはどんなものであったかを我々が知っているとは仮定しての話ですが。

細貝 アンブロジーノは、アセファルの活動を通じてはなし得なかったこと、そこで失ってしまったものを取り戻そうとしていたと言えるでしょうか。

レイ 私はそう思いません。それは純粹に説明的な見方であり、一つの仮説ではありますが、私は、彼ら全員——そして特にアンブロジーノに顕著に見られたのですが——に、その物語と決別したい、ほぼ完全にというほど身を離したいという意志があったと思います。それは、私がした全ての質問と、彼らの、そのことについてはもう何も知らないという態度を通じて、私に強く感じられました。ですから、言わばほとんど暴力的というような何かがありました。その男——私はアンブロジーノのことを言っているのですが——は、そもそもユーモアを好むようなところと、同時に少々暴力的なところがありました。いずれにせよ、彼には、それを、いわば「抹消し」ようとする、忘れ去ろうとする断固とした強い意志がありました。そのグループで行われていた活動は、全く別のこと、つまり、知を友好的に伝達すること、一緒になって考えることであったと私は思います。しかし、30年代半ばにグループの形成を可能にした何かは、もはやアンブロジーノの中にはありませんでした。ただし、それも、かつて何が起こったかを我々が知っているとは仮定しての話となります。そもそも、それを知ることはそれほど重要でしょうか。

### 「アセファル」とシュールレアリスム

細貝 30年代のフランスの知的活動のなかで、アセファルのグループは極めて特異で奇抜なケースであると思われませんか。

レイ もちろんそれはそこに加わっていた人々などにより、非常に特異なものでありましたが、同じように価値のあるもの、もちろん全く同じというわけではありませんが、類似した、あるいは近似のものがあったと思います。それは例えばルネ・ドーマル<sup>14)</sup>を中心とした「大いなる賭け Le Grand Jeu」です。実際、それは、私の知る限り、いずれにせよフランスにおける、明らかに激しい知的沸騰の瞬間でした。それは同時に強い異議申し立ての瞬間でもありました。それら全ての人々が、激烈さ、批判的な何か、断固たる何かを持って共通のプロジェクトに臨

んでいて、それはシュールレアリスムと対照的な態度でした。シュールレアリスムは「大いなる賭け」や「アセファル」のようなグループと比べて、少々弱々しく見えますから。それは、明らかに当時の政治状況、つまり、イタリアファシズムの台頭、ドイツでのナチズムの台頭、さらにロシアでの共産主義の非常に矛盾に満ちた状況——というのも、そのグループにはボリス・スヴァーリン<sup>15)</sup>がいたのですから。元々、アンブロジオーはスヴァーリンをよく知っていました——と関係を結ぶことにありました。それらの人々の進展は、スヴァーリンのそれと全く歩を合わせていました。左翼やソ連などの批判から始まり、スヴァーリン、さらにアンブロジオーは極めて反動的な意見を持つ人々となっていったと私は思います。アンブロジオーに関する思い出しましたが、ベトナム戦争の最中、フランスではベトナム戦争に対して多くのデモがあったのに、彼はベトナムのアメリカ人を擁護していました。アンブロジオーは、アメリカ人でさえそれほど良い調子というわけではないと考えていたのです。ですから、そういう面があったのです。たとえば、当時、ある高齢の女性がいて、マリア・ジョラス<sup>16)</sup>という名の、非常に重要人物で、元々はアメリカ人でした。彼女の夫は、当時はもう亡くなっていたのですが、ジョイスを編集し、フランスにジョイスを紹介するのに貢献をした人です。マリア・ジョラスは、アメリカ人であり、確か75から80歳くらいの年齢であったのに、ベトナムでのアメリカの政策に反対するデモを、最前線で行うためにフランスに赴いたのです。（彼女は音楽家ベッティー・ジョラスの母でした）このように、このグループには同時にせめぎ合いが、政治に関わるせめぎ合いがありました。

**細貝** 「アセファル」や「大いなる賭け」のようなグループの特徴の一つは、哲学を生きること、哲学的概念を身につけるだけに飽きたらず、哲学のテキストから掴んだことを実践するところにあると思います。

**レイ** そういうところは多分あるでしょう。実際、「大いなる賭け」の全てのグループもある種の実践をしていましたし、それも非常に強度で行っていました。ドーマルの作品はとても興味深いと私は思います。全く思いもかけないと同時に興味深い道筋を持ち、非常に力のある作品です。ドーマルは確か非常に若死にできて、それらのグループには、なるほど、理論と実践、思想と生活の闘いを解消しようとする意志があり、一般人としての生、文学的な生、政治的な生に、それらの領域の区別を気にせず関わり合おうとする意志がありました。ゆえにそれは重要だったのです。

**細貝** シュールリアリストにはそういう闘いはないのですか。彼らは思想と生活を切り離して生きねばならなかったのですか。

**レイ** たぶんそうです。ただし、これは私の全く個人的な意見ですが、運動のリーダーとしてのアンドレ・ブルトンの運営方針、ご存じのように、バタイユや、ドーマルのような人々に激しく糾弾された——彼らはすぐに離れていくわけですが——立ち位置が問題だったのです。それはシュールレアリスム運動を通じて長く続いていたやり方、とりわけ排斥によって事を処理しなくてはならなかったということです。ブルトンはあたかも政治的な部分における最も馬鹿げたことを模倣するかのよう、に、隊列に入らなければ、その人を排斥したのです。そういう次元のことがらが、たぶんそれらのグループの方針を決定づけたのです。ちなみに、アルトーも、他の理由もあるのかもしれませんが、同じような理由から自らの方針を決めました。それは、

シュールリアリストたちの中に何か興味深いものを認めながらも、同時にそこから直ぐ身を引き離し、非常に辛辣な批評をするというものでした。ドーマルと同様に、バタイユや彼の仲間も、シュールリアリズムを極めて辛辣に批判するようになっていきました。そこにあるのは、ライバル関係ではなく、極めて困難な関係性の問題であり、そこには多くのことが絡んでいました。多くのこととは、もちろん、主導権の問題ではありませんが、アンドレ・ブルトンにおける模倣、政治の問題、さらには、変質や発展との関わりの問題などでした。それら全てのグループに何か共通するものがあるとは思いますが、そうです。つまり、誰もが根本的に何かを変質させたいと望んでいるのですが、何が変質するのか、またその変質の理由は何かということについて、誰もが同じ分析をしていないということです。確かに、例えば、至高性やそれらの問題全てについてバタイユが行った分析は、語の肯定的な意味で「迂回」ではありますが、それは必要な迂回だと思えますし、その迂回により、政治、文学、理論などにまたがる数多くの問題が提示されるようになりました。そこにバタイユに於ける理論的な力を見ることが出来ませんが、そのような力は明らかにブルトンに於いては存在しません。時々大がかりな宣言がありますが、分析は全く行われないうのです。

#### バタイユとファシズム

**細貝** バタイユがブルトンに対して行った批判は、ブルトンが人間の物質的部分について過小評価をしているというところに向けられたものではありませんか。

**レイ** ええ、それも一面あるでしょう。たぶん、最も目につきやすい一面です。ただし、もっと他のものもあると思います。特に非常に複雑な問題があるのです。先ず政治的な力について、さらに変質可能なもの、変質不可能なものについて当時行い得た分析、また、聖なるものについて当時行い得た分析を考えてみましょう。確かにブルトンにはそれに関するものはそれほどありません。一方、バタイユの興味は、むしろ矛盾に満ちた興味ではありますが、それでもその興味は、その種の問題に光を当て、その時代のファシズムとは何かについて、ブルトンより遙かに真っ向から取り組むことに向かいました。それはファシズムに蠱惑されての興味だとも、それに対する批判ゆえの興味だとも言われます。どちらかに決めるのは難しいですが、いずれにせよ、これだけは言えそうです。それは、バタイユは政治的なファシズムと、特にそれがもたらすあらゆることに対し、真摯に取り組んだということです。それは単に態度を表明するのではなく、それが表現すること、それがもたらす主要な問題を考慮に入れることです。問題は、あるいは問題の一つは、彼がファシズムに蠱惑されていたか否かを明らかにすることです。

**細貝** あなたのお考えでは、バタイユに於ける至高性という考えの中に、ファシズムに対する彼の興味が反映されているということですか。

**レイ** まさにその通りです。その仕事の全体——それは、ある意味で幸運にも未完成の仕事ですが——はその方向へ向かっています。実際には至高性についてであるその仕事の全体は、それらの問題に正面から取り組むためのものでした。それはたぶん同様に、その主題へと、当時の

人類学的研究の一部をそっくり統合しようとする興味もあったのです。レリスを例に取れば、彼がどれほどその主題に巻き込まれていたかはよく分かります。しかし、バタイユの力というのは、ブルトンがやっていたようなスローガンを超えて行くことの必要性を理解し、自分の仕事に、その思考の歩みに、その考察に人類学——人類学というのはあらゆる種類のものを指します。もちろんモースもですが、他のことも含まれます——の一部を取り込んでいこうと試みる——それはまさしく試みであり実験でありました——ところにきっとあるのです。それは非常に偏って行われていました。しかし、それは悪い意味でなく、つまり、他のものよりもそれが強烈であるような瞬間があったという意味です。何に蠱惑されていたかについて決めつけることができないというのもそこにあります。ぞっとする幾つかの面、例えば例の中国人の磔刑図などに蠱惑されていたか否か。そこには様々な議論があります。しかし、そこには同時に様々な問いがあるのです。それは真に受けるべき何かではなく、問うことを試み、問い続けることのできる何かがそこにあるということだと思います。ですから、どのようにそれが用いられるのか、また、どのように人類学的、民族学的な知が捉え直されるのか、さらに、どのようにその知がそういった思想の進展の内に統合されるのかを見ようと試みるべきだと私は思います。

**細貝** 「ファシズムの心理構造」の頃のバタイユの立場に忠実になれば、彼は、ファシズムの一面を取り上げ、それを古代の王の社会的地位と比べることで評価を下していました。バタイユによれば、その原初形態に置かれたファシズムは、古代の王のように、それが持っている魅力で人々を蠱惑していました。しかし、今日のファシズムはその魅力を失っており、人民を政治の力で支配しようとします。このような状況で、ファシズムについてのあなたの読解に基づくと、バタイユはファシズムに対して評価をしていたと考えられるのか、それとも逆だと考えられるのか、どちらですか。

**レイ** そこには、テキスト同士を突き合わせて細部まで検討し直さなくてはならない重要な問題があります。そうしないと、余りに一般的で不確かな立場に留まり続けることになります。ファシズムの問題は、歴史的、政治的な焦点と照らし合わせ、特別な注意をそこに払うよう我々に求めて来ます。

**細貝** ファシズムの起源にまで遡れば、バタイユはファシズムという考え自体に完全に反対していた訳では無いと思います。

**レイ** 曖昧なところですが、私にははっきりとそう思えます。明らかに曖昧さがあります。その曖昧さ、それを単純化してはなりません。簡単に「彼はそれに蠱惑されていた」と言うわけにはいかないのです。それは何の意味もないことであり、蠱惑と批判の関係が同時にあるのも明らかです。それから、時期によっても様々であり、テキストの調子も異なります。そのことはよくご存じですね。そして、フランスなどでこのような方向に向かうデモがあったときなどは、態度をはっきりと表明していました。この問題には様々な段階がありますが、私が自明だと思うのは、先ず問いを提示する権利があるということです。それは義務ですらあると思います。というのも、そうしなければ、私たちも蠱惑されてしまうからです。それでは何も面白いことは出てきません。ですから、私たちは問いを発する権利があります。もし私たちが問いを発するなら、即答でやつはファシストだと口走る誰かのように、答えを急ぎすぎないようにしなく

てはなりません。それは何の意味もありませんから。そして、問いを發するのであれば、それらを、研究を通じてテキストに基づかせ、考察を可能な限り明確にしようと試みなくてはなりません。それこそが問題なのだとは私は思います。興味を持つということは、たぶん、完了せず、自閉せず、特定の何らかの点に還元されない考えを持つことなのです。よって、私の意見では、それこそが、私たちを隔てるわずかな歴史的距離を利用して、今日なし得る研究の意味なのです。

**細貝** 「ファシズムの心理構造」の時代にバタイユがファシズムに対して抱いていた高い評価は、彼に集団で研究をする傾向があったことと何か関係があると思います。30年代の人々はなぜ単独でなく集団で研究をするを選んだのだとお考えですか。

**レイ** 分かりません。今やバタイユの行っていたような種類の研究とはほとんど対立していますから、私にはよく分からないのです。それは非常に孤独で、まさに単独での研究です。彼がやっているのは制度的な研究ではありません。私には分かりません。幾つもの理由が一つのまとまりをなしているように思います。理由の一つは、たぶん状況による緊急措置です。つまり、自分自身の研究を、他人の視点を取り入れて取り組まなくてはならなかったのです。たとえそれが困難で矛盾しているとしても、です。例えば「社会学研究会」がそうです。たぶん、社会学研究会は、それでもやはり残存する、もっとも充実したバタイユの作品であり、思想であると言って良いという事実があります。しかし同時に、社会学研究会の全体を眺めたとき興味深く思えるのは、参加者の多様性です。例えばバタイユはカイヨワと対照的です。それが多様性ですが、それはまた対立を生み、様々な相容れないことがら、一連の問題がその領域の内部で対立しているのです。そこにある種、極めて多様なイデオロギー的、政治的立場があるのです。しかしそれは端的には研究領域の多様さでもあります。再度バタイユとカイヨワを比較し、次いでその後の進展を比較するなら、そのことがよく分かります。ですから、それは困難で深刻な時代の只中で、何かに正面から取り組もうという試みであると同時に、ものごとの危険な部分に立ち向かう力、矛盾や異論に立ち向かう力でもあると思います。それは複雑です。というのも、社会学研究会にはそのような非常に目につく一面があるからです。もっとも、今でこそ目に見えますが、当時はほとんど見えませんでした。しかし、たとえばそれと同時に友愛がありました。バタイユがモーリス・ブランショに持っていたのは、友愛以上のものでした。当時のモーリス・ブランショはファシズム、まさしく極右に属しており、ユダヤ人排斥の立場でした。彼は戦争を機に全く変節しました。それは確かですが、他方、遙かに孤独な歩み——バタイユの歩みがそうです——があり、たとえば『内的体験』のようなものの中によく見て取れます。その中でバタイユは、私の知る限り、そのグループのほぼ誰一人にも言及していません。「社会学研究会」の主要人物のうち誰一人として引用されていないのです。その中では、むしろニーチェや神秘家等と対峙しているのです。

**細貝** それはまさしく語の正しい意味での内的体験というわけですね。

**レイ** ええ、それから言ってみればもっと重要な対話者と相対しています。それはニーチェであり、アンジェラ・ダ・フォルイーニョ<sup>17)</sup>なのですから。

**細貝** マイスター・エックハルト<sup>18)</sup>もいますね。

**レイ** ええ、マイスター・エックハルトもいます。ですから、たしかに同時に多方面に接着して

研究をするこの方法をとっています。そのやり方は多分バタイユにも誰にでも見られるのでしようし、その時代に顕著に見られたものでもあるのです。それからアンドレ・マソン<sup>19)</sup>との間にも同じような友情があります。

### 「テル・ケル」とその周辺

細貝 あなたが青年期を過ごされた1960年代、あなたが例えばアンブロジーノのような人と一緒にグループで研究をすることを選ばれた理由はなんですか。

レイ 正確には分かりません。そのグループは私の研究のほんの一部でしかありませんでしたし。

細貝 バタイユの時代と同じような意味があるのでしょうか。

レイ そうですね、ただし同じような問題意識を抱えていた訳ではありません。切実な政治的背景などはありませんでしたし。それから、アンブロジーノのグループは非常に分裂したグループだったのです。それは社会学研究会が持っていたような一貫性を——矛盾は持っていましたが——全く持っていなかったのです。それは非常にまとまりのないグループでしたが、内密なことに関する記憶が、切れ切れに戻ってきていたところもありました。それから、フランスでの私の個人的な体験ですが、闇組織ではないけれど、大学の傍らにあり、表に現れないグループ研究に私も良く参加していました。今でさえ、ひんばんにそのような活動、3から5人の小グループやもっと人数の多いグループに参加しています。何年もの間、私は社会科学高等研究院で非公開のゼミをやりました。参加者は10人でした。社会科学高等研究院には、全く表に現れないグループの存在があるのです。よって、それは、いずれにせよわたしの世代にとっては、さまざまな理由でひんばんに行われていることなのです。

細貝 大学制度の外部に幾つものグループがあるのですか。

レイ その通りです。精神分析の領域に様々なグループがありました。ちょうど、「テル・ケル」——そこには私も長いこと参加しており、誰でも参加できました——の周辺に幾つかのグループがあったようにです。私の経験では、限られた人たちだけのグループに幾つか参加したことがあります。参加者が限定されていたのは、それが秘密結社だったからではありません。単純に、仲間内で研究しようと決めたからです。それは私が学生の頃から非常にありふれたことでした。学生でありながら、私は5人の仲間とグループを組んでニーチェを研究しました。法的には全く実体がありませんでしたが、定期的集まっていました。それは1965年に始まったと思います。数年継続しました。

細貝 学生同士でグループをつくるというのは理解できるのですが、大学を出てからも研究を大学の外部で続けるということですか。

レイ ええ、ただし、私が社会科学高等研究院で参加していたグループは、非常に多様な人々からなるグループでした。医学史家、古代ギリシャの人類学研究者、精神分析家、哲学者も2人いました。非常に異質なまとまりです。イスラムの専門家も、イタリアルネッサンスの専門家もいました。原則は、交代でそれぞれが——ほぼ月1回のペースで集まりました——目下進行中の研究の一部を紹介するというものでした。それは異質なものでした。私が20年から

30年来参加しているグループはむしろそういったものです。現在の研究の一部を紹介し、最小限の相互理解と共感を分かちを持った人々同士で、全く自由に、権力への配慮もまるでなしに議論をするのです。私としては、それは極めて実りの多い、極めて興味深い何かであったと断言できます。それは何年も何年も続きました。

細貝 それはフランス特有のものだとお考えですか。

レイ 分かりません。フランスではそうだったとしか言えません。広く行われているかどうかは知りません。

細貝 たとえば日本では、アカデミックな領域の外部でそのようなグループを見つけるのは大変に難しいのです。

レイ それが非常にフランス的かどうかは分かりません。いずれにせよ、私の経験では、私が学生だった頃、つまり、1960年代から現在まで、私はそのような多くのグループに参加してきたということです。数多くのです。多くはその構成が異質なグループでしたが、そこには最小限の相互理解がありました。そして、それらは、各々が研究の一部を持ち寄り、議論の題材とするという原則をもつグループでした。よって、研究も概してスケッチ程度のもの、錬成の途中のものでした。それはまた、雑誌に発表されるのがよいような研究でした。私は精神分析家の友人、マリー・モスコヴィッチと創った雑誌『時事ノート *L'Écrit du temps*』に参加しました。それは同じような趣旨のものでした。私たちは二人でしたが、周りにちょっとしたチームができていて、二人で友達や、その研究が評価されている人々に依頼して数巻をつくりました。それは同じような趣旨のものであったと言ってもいいでしょう。

細貝 よく知られている例として、「テル・ケル」という名のグループを挙げることができます。あなたはこのグループとある時期交際を密にしていましたね。

レイ ええ、ある時期はそうでした。正確には68年から71年の間です。

細貝 その話題について話していただくことはできますか。

レイ つまり、その当時彼らに会ったということです。私は『テル・ケル』を第1号から読んでいました。60年代の初めに第1号がでました。私にはそれがとても面白く思えました。文学的な見地と、包括的な考察という見地の両方から成っていました。ジャック・デリダもそのワーキンググループに参加していました。

細貝 その枠内で、あなたはバタイユの作品の抜粋を発表されたのですね。

レイ ええ、その通りです。それはまさしく私とそのグループのメンバーとひんぱんに会っていた時期です。それは非常にまとまったグループで、当時、すなわち68年5月から数ヶ月後、彼らは「理論研究グループ *Groupe d'études théoriques*」という名のものでつくったのです。それは広く公開された集会でした。そもそも、多くの人間がいて、当時、誰かに講演をしてくれと頼んでいたのです。よく覚えています。私もフロイトについての講演をしました。それは69年か、70年のことです。サン＝ジェルマン＝デ＝プレ教会の向かいのレンヌ広場でした。多くの人が集まりました。150人から200人ほどいました。それからソレルスやクリステヴァと友達になりました。ただし、数年後、彼らと仲違いしました。それから例えばジャン＝ルイ・ボードリ<sup>20)</sup>と親交を結びました。彼は私のセミナーで見かけたことがあるでしょう。彼とはいつも親交を結んでいて、もう長いこと友人でいます。それで、私はそのグループに入会しません

でしたし、したいと思いませんでした。そのグループに協力をし、彼らの出版物に興味があったというだけです。当時は面白いと思ったのです。

細貝 何故そのグループに参加しようと望まれなかったのですか。

レイ 先ず、彼らが私に参加を望まなかったのです。さらには、それが長いこと、ある規則に従って活動を続けてきたグループだったからです。編集部と言い換えても良いでしょう。私はそのグループに入ることを望む理由が全くありませんでしたし、その上その願望もなかったのです。というのも、何年もかけて既に強固に作り上げられたグループには入れませんよ。そこで、私が参加していたのは、私が特にデリダと親交を強く結んでいた時期でした。私はデリダと共にそのグループに入ったのです。バルトがいて、彼もまた講演を聴きに来ていました。それは極めて開放的なグループでした。アルト<sup>21)</sup>の専門家ポール・テヴナンやひとまとまりの人々がいました。そこには、かなり多彩な人々の醸し出す気の置けない一面がありました。一度はジャン・ジュネが来ました。私の記憶に間違いがなければ、それは2年続きましたが、非常に興味深く、実りのあるものでした。その後、仲違いがあって……まあ人生そういうものですよ。

細貝 サド、バタイユ、ニーチェの再評価は「テル・ケル」グループの貢献が大きいですね。

レイ ニーチェは違います。ニーチェだけは違いますが、サドやバタイユはそうでしょう。彼らは参加していましたが、彼らだけしかいなかった訳ではありません。同様にクロソフスキーのような人々もいたのです。クロソフスキーの研究は刺激的な研究でした。私はクロソフスキーをよく知っていたのですが、それは非常に興味深い研究でした。全く単独の研究でしたが、様々な観点から見て、文学的な観点からしても非常に興味深いものでした。

細貝 クロソフスキーをよくご存じだったのですか。

レイ ええ、その当時は彼をよく知っていました。彼と知り合ったのは66年くらいだと思います。それからその時期は良く会いました。しばらく会わなくなり、85年か86年頃に再び会いました。しかし、何年間かはかなりひんぱんに会ったのですよ。クロソフスキーの研究はニーチェとまたサドの再評価という観点から見て先駆的な研究でした。それは当時、どちらかというが目立たず、それほど知られてはいない仕事でした。彼は後にイラストレーターとして、画家として知られるようになりました。しかし、60年代当時は、それほど知られていなかったのです。ただしそれは、それら全ての作家ついて、疑いなく極めて意義深い効果を与える重要な作品でした。彼は同様に、同じ頃、ウェルギリウスの『アエネイス』の極めて興味深い翻訳もしていました。彼はもちろんバタイユをよく知っていました。彼もバタイユについてはほとんど語りませんでした。彼は話したくなかったのだと思います。私は彼にも問いましたが、彼は明らかにそのことについて話したくなさそうでした。ええ確かに『テル・ケル』はバタイユを知らしめるのに一役買いました。アルトも紹介しましたね。私の方でもアルトを独りで読んでいた時期でした。というのも、私はアルトを非常に早く、1956年に、一人の兄の本棚に見つけていたからです。それは刊行されたばかりの全集の第1巻でした。ですから、その点からすると、実際、『テル・ケル』にも何か建設的なものがありました。それは確かです。多くのことを広めることになった何か重要で建設的なものがありました。

細貝 「テル・ケル」の活動全体をどのように総括できますか。ちょっと難しい質問ですか。

レイ いえいえ。それはまず文学的な活動でした。つまり、作家、良い作家を世に知らしめまし

た。例えばジャン＝ルイ・ボードリヤール——彼は良い作家ですよ——や、ソレルス——彼だって時々には良い作家です——のような作家をです。それが知らしめた作家の中には、大変に興味深いドゥニ・ロシュ<sup>22)</sup>がいます。それから、それは一方で、多くの人を惹きつけ、しばしば興味深いテキストを出版するという機能を果たしていました。さらに、重要な理論的研究を記録し、流通させるのを可能にしました。デリダの幾つかの試論は『テル・ケル』に発表されました。マラルメについての「連続講演 Le double séance」が一例です。それは、69-70年に私が参加していた理論的なグループで行われました。そのように、非常に内容の豊かなあるタイプの仕事を記録したり、それに耳を傾けたりするというようなことが行われていました。そして、パティユやアルトーの未発表の作品を世に知らしめるというようなことも行われました。『テル・ケル』はまさしくそのようなものを流通させ続けたのです。それは明らかです。それは私にとって、『テル・ケル』が持っていた興味深い点の一つでもありました。

細貝 あなたは「テル・ケル」の活動の一つを「反動的」と評されましたね。

レイ いいえ、反動的とは言っていません。全く反動的ではありません。

細貝 そうですか。

レイ 全く反動的とは言っていません。彼らが1971年に毛沢東主義になったとき、仲違いをしました。デリダと私は彼らと仲違いをしたのです。それは馬鹿げた子供っぽい政治でしたからね。けれど反動的ではありませんでした。それはむしろ求道的、進歩主義的な面がありました。後に違うものになりましたが。私はそれほど関わってはいませんが、1960年代に、それは重要な役割、極めて重要な役割を担っていました。それは多くの人間を集め、多くのことを流通させました。非常に活動的でした。それは、フランスの文化的な生の中で決定的でした。それは確かです。ただしそこにも論争はありました。あらゆるグループは同様の問題に直面します。除名があったり、論争があったり、ただし、それは私がどうということではありません。

細貝 あなたがそのグループから距離を取った最大の理由は、彼らの政治的な志向ですか。

レイ そうです。とりわけ、私から言えば全く空想的な政治志向でした。馬鹿げていて非常識でした。ただし、その裏で、彼らが選んで掲載するものの中に私のが含まれなかったということもあるのです。

細貝 それは革命へ向かう政治志向だったのでしょうか。

レイ 超革命的でした。ただし、ある意味に於いてです。彼らは中国と文化大革命をフランスの当時の状況からすれば全く馬鹿げたやり方で擁護したのです。それは耐え難く愚かなことでした。その時に、もうこれ以上は無理だったので、デリダと私は彼らから離れました。けれども彼らは相変わらずそのような行動を取っていました。ただし、それは言わば副次的なことでした。その後、雑誌はつまらなくなりました。全く個人的な見解ですが。

細貝 つまらなくなると仰いましたが、それはいつ頃からでしょう。

レイ そうですね、その後彼らはほぼ何でも掲載していましたから。以前、彼らの選ぶテキストには一定の路線や一貫性がありました。その後、正確には分かりませんが、73年か74年から、だんだんと何でもありになっていきました。ですから、変わらずに面白いものもありましたが、同時にまったく面白くない——少なくとも私にとっては——ものも混じっていました。

細貝 選別を止めたのでしょうか。

レイ そうです。もう選別がなくなったのです。路線の問題ではもちろんないのですが、掲載されるものに一貫性のないことがよくありました。ちょっとしたがらくた置き場になってしまったのです。

### フーコー・デリダとの出会い

細貝 あなたの哲学研究の道のりに話を少々戻させてください。博士論文をお書きになった後、あなたはフーコーのような高名な哲学者たちと共同で仕事をされました。それはどのようになされたのですか。

レイ フーコーとはそれほど一緒に研究をした訳ではありません。フーコーと共同で授業をしたのです。ヴァンセンヌのパリ第8大学の創生期でした。それは68年の直後の沸き返っている時期でしたから、哲学科には生徒が大勢いて、フーコーは私がニーチェについて研究している——それは私がニーチェについての博士論文を書いている時期でした——ことを知っていましたから、私に「さあ、ニーチェについての講義を一緒にやりましょう」と言ったのです。私は引き受けました。若かったのです。26歳、いや27歳でした。それから私たちは話し合い、結局、講義はやらないことにしたのです。第1回目の授業の後、生徒達に質問を私たちに送ってくれるよう頼もうと決めたのです。それで、毎週、あるいは電話で、あるいは手紙で、生徒からの質問を受け付けたのです。ただ生徒の質問に答えることで1セメスターを過ごしたのです。それは大変にうまくいきました。というのも、極めて熱心な学生や、一部には非常に才能のある学生がいましたから。そこでもまた、聴衆は極めて多様でしたが、いずれにせよきちんとした教育を受けた、非常にしっかりした学生集団がいましたので、全く持っておもしろいものでした。そうですね、むしろ、私よりも頻繁に一緒に研究をした人物はデリダです。というのも、彼のことは60年代の初め、彼がソルボンヌで助手をしているときから知っているのですから。私たちは65か66年から親交を深め、彼がエコール・ノルマルにいたときはしょっちゅう会いに行ったものでした。それから一緒に研究をし、定期的に会いました。何年間かは良く語り合い、何度も会いました。その後、80年代、いや80年辺りに再会しました。小さな私的なセミナーで再会したのです。

細貝 それはどこで行われたのですか。

レイ 私たちの内の一人の家です。そこで、精神分析家たちと一緒にでした。そこに来ていたのは、ヴラジミール・グラノフ<sup>23)</sup>——彼とは一緒に仕事をしました——、マリー・モスコヴィッチ、デリダ、彼の妻<sup>24)</sup>——精神分析家でした——、ルネ・マジョール<sup>25)</sup>、もう一人の精神分析家マリア・トロック<sup>26)</sup>です。私たちは一年間に渡り、一種のとても砕けたセミナーを行いました。本当に、非常に砕けたものだったのですよ。目的もありませんでしたから。ですから、それもまた、もう一つの異なる仕事のやり方だったのです。それで私もセミナーを行いました。それも全く私的なもので、精神分析家たちを含めて5、6人でした。グラノフ、マリー・モスコヴィッチ、彼らほど有名でない他の人たちと、この時期にやりました。今言ったグループの中で、分析家でないのは私だけでした。

細貝 あなたはデリダから哲学的な恩恵を受けましたか。

レイ ええ、もちろんです。私にとって、自分の学問形成で最も重要な人物はデリダです。それは明らかです。彼は、私たちにテキストを読み、研究し、細部に目を凝らすことを教えてくれた人物です。

細貝 概念形成という点で、あなたはデリダの思想から影響を受けましたか。

レイ 影響という点では、そうかもしれないという程度には留まらないでしょう。ただし、いずれにせよ私にとっては何とも言えないのです。彼が私にとって極めて重要な人物であることは分かっています。彼は、私とその初期の仕事を読み感嘆した人物です。ただし、特に、それは、こういって良ければ、私に合った思考スタイルだったのです。というのも、その思考スタイルは異なる領域に同時に向かっていたからです。それが私には興味深かった。それは単に哲学史やある特定の問題ではなかったのです。それは、おおざっぱに言ってしまうと、言語の問題を重視する思考スタイルでした。さらに、それはまた——それも私が興味をもった理由の一つなのですが——哲学領域から文学領域へと移行する思考スタイルなのです。ええ、彼は、私が本当に若かった頃、18歳だった頃に教師であったがゆえに一層、私の学問形成において最も重要となった人物なのです。

### 哲学の自律性に抗して

細貝 あなたはしばしば文学について言及していますが、本来は哲学領域の出身ですね。

レイ 後から定式化したのですが、当時にも実感していた考えがあります。それは、哲学の領域だけで仕事は出来ない、哲学は常に他のものと接続される必要があるという考え、感覚です。それは仕事に対する私の考え方です。もちろん、20歳の時にこんな風に明確に言うことは出来ませんでしたよ。しかし、いずれにせよ、私はまず、哲学テキストと文学テキストという二種類の読書に興味を持っていましたが、同時に、哲学を孤立した領域として実践することはできないとも考えていました。哲学を他のものと関係づけなくてはならないと。私が最も親密さを覚え、魅惑されたのは文学でした。その結果、絶えずあらゆる可能な関係を打ち立てようとするようになり、文学テキストは思想を、時には哲学テキストよりも多くの思想を含みうると考えるようになったのです。

細貝 なるほど。

レイ それで、誰かがやっているようにテキストを階層化するのではなく、思想のつながりを哲学テキストの間にのみ見るのではなく、それ以外の場所に見るようにしたのです。

細貝 哲学者というのは専門用語、哲学用語の使用に大変注意を払います。彼らは大変用心深いように見えます。一方、あなたのテキストでは、哲学的な専門用語は見受けられません。概念の使用を避けていらっしゃるのですか。

レイ そうです。避けようとしているのです。というのも、実際、私はそれを哲学からできるだけ遠いところでやらねばならないと考えているからです。それはまた別の考え方です。その手段を出来る限り見つけようとしなくてはならないと思いますが、それは単に教育上の理由だけ

ではありません。そういう意味もありますが、それだけではないのです。というのも、哲学用語に自律性などはなく、それは幻想だと思うからです。つまり、そう考えるのはまやかしののです。ですから、常に2つの領域で仕事を続けようとしなければならないのです。シーソーが動くようにです。哲学のテキストを読むのはもちろんですが、それと同時に、それらがどれほど、言葉や、構文、文字などへの配慮を前提としているかを明らかにする必要があります。そして、そのようにして、テキストの物質性そのものを読み取る必要があります。さらに、それが思考の操作として前提としているものを見なくてはなりません。そこで、私が今やろうとしているのは、少々毛色が異なりますが、同じ原理に基づいています。それは複数の領域について仕事をすることでもあります。それで、一月後にエドガー・キネ<sup>27)</sup>——偉大な随筆家、歴史家、ミシュレ<sup>28)</sup>の友人でありました——の本を出版する予定です。あるテキストを、巻末に長い後書きを付けて再刊したいのです。私がやりたいのは、エドガー・キネやミシュレのような歴史家に、とりわけエドガー・キネに、真の哲学的な思考があることを示すことでもあるのです。それは正真正銘の哲学者であり、その哲学的なアプローチが、歴史上の問題と結びついているとも言えるのです。よって、それは、私が特に関心をもっていることなのです。それは、結局、フランス19世紀の一部を踏査すること、つまり、19世紀のフランスの中で、特に、ミシュレ、キネ、その他の中で、私にとって興味深い思考の歩みがどのように残されているのかを示すことでもあるのです。さらに、去る11月に——ご覧になったかどうか分かりませんが——聖パウロについての短い本を出版しましたが、そこで、聖パウロのテキスト、聖パウロの歴史的な見取り図について考察をすると同時に、19世紀において、ほぼ誰も彼も——つまり、オーギュスト・コント、サン・シモン、キネ、ピエール・ルルー等——が、どれほどに、聖パウロのこの歴史的なテーマを何の改編もなく取り上げているかを示そうと試みました。ですから、キリスト教の社会的な地位に関わる問題であるのはもちろんですが、同時に、時間についての思考、歴史についての思考にも関わる問題を考えてみようとしたのです。これが、現在、キネの仕事を通じて、辿りたいと思っている方向ですし、その周辺にある別の計画もあります。

**細貝** さきほど哲学的な幾つかの語の自律性についてお話されましたが、そのように哲学的な語が自律するという信念を持つ哲学者は多いと思います。

**レイ** 分かりますよ。しかし、それは先入観ですね。どう言ったらいいか、幸いなことに、哲学研究には巨大な領域があるのです。そのことをたぶんニーチェとヴァレリーから学びました。ニーチェとヴァレリーの著作は、私にとっての偉大な教科書です。散文とカイエのヴァレリーです。つまり、哲学的な言語、その非＝自律性、隠喩に富む用語、そのあらゆる作用について考察することです。それはまた、たとえとして引くならば、たぶんヴィットゲンシュタインに由来するあることがらに関連するのです。ヴィットゲンシュタインには、同種の、極めて重要な問題が存在します。よって、なるほど研究者の中には、哲学的な語彙は完全に自律的だと考える人もいます。私の意見はそれとは異なります。私は自分の研究を通じて、自律性などないこと、たとえ私が数多くの哲学テキストに大変な興味を持っているとしても、哲学テキストに与えるべき特権など、結局は存在しないことを示そうとしています。さらには、いわゆる文学的あるいは美学的なテキストの中に、哲学テキストと同等の思考力を備えたものがあることを示そうとしているのです。それが私の基本的な考えです。エドガー・キネはヘーゲルと同じく

らい哲学的なのです。もちろんそのあり方は全く異なりますが、私の考えでは、それは極めて強力な思考操作で、とりわけ、私が思うに、我々が未だに解決できない問題に対峙しているのです。よって、それは歴史的、考古学的な寄与というだけでなく、我々が現在巻き込まれているさまざまな問題でもあるのです。私が興味を持っている19世紀とは、まさしくそれです。つまり、多くの信念と向き合う世紀であり、歴史の位格に関わる問題なのです。というのも、それは、いずれにせよフランスに於いて、歴史に残る極めて重要な学派が存在した重要な瞬間なのですから。歴史の位格に関わる問題、時間の位格に関わる問題です。さらに、キリスト教が、それが象徴的にもたらず影響の中でどのような場所を占めるかという問題であり、制度によって提示される問題、死ぬものと死なないものについての問題なのです。死ぬものもあれば、死なないように見える制度もあります。それは、ミシュレやキネのような人々が、それにより提示される問題を通じて考察したことです。そこで、少しだけ政治的なレベルが重要となってくるのです。つまり、非常に深遠なもの、遙か彼方からやってきて、大きな政治的な変動を生き延びるさまざまな形態の思考、さまざまな形態の表象がどうやって存在するのかということです。つまり、生き延びるといふ次元全体に関わることです。つまり、同時に政治と神学とに関わる問題、こういって良ければ、神学政治と呼ばれるような問題が、いかにして存在するのかということです。

細貝 ボードレールの言う「モデルニテ」という考えと関係があるのですか。

レイ ええ、もちろん、多かれ少なかれ関係はあります。ボードレールもこの種の問題と向き合っていたと思います。それは明らかです。ボードレールは——私は直接ボードレールを研究対象にしている訳ではありませんが——、この種の問題をもっとも鋭敏に察知した者の一人です。それは明らかだと思います。

細貝 仮初めなもの、永続的なものが交錯するという考え方ですね。

レイ そうです。それから、かつての時代のものたちの残存を、エドガー・キネにも見ることができるでしょう。それは極めて力強い形を取っています。私たちは、かつての時代の制度や表現に、それとは知らずどれほど囚われていることでしょうか。キネは、ラ・ボエティの16世紀の古いモチーフを再び取り上げ、それが「自発的な隷属」の一種なのだと断言しています。つまり、知の中に、さまざまな形の隷属があり得るといふことです。とりわけ、歴史的な知の中に、です。

### ヘーゲルを読むということ

細貝 哲学的な言語の自律性については、多くの哲学者、特に言語哲学の領域にいる哲学者の多くが、デリダの仕事、デリダの概念は極めて曖昧だということで批判しています。同様の批判がバタイユに対しても、ヘーゲルの専門家から提示されています。

レイ ええ、全くその通りです。

細貝 バタイユは、幾つかの概念を、余りよく考察せずに使用していると。

レイ そうですね。

細貝 この種の批判についてはどのようにお考えですか。

レイ 一般的には、私はこの種の批判にはそれほど注意を払いません。というのも、それは全くスケールの異なる問題に対して、直ちに判断を下すものだと思うからです。確かに、バタイユはヘーゲルを綿密に読んではいません。それは明らかです。ヘーゲルの専門家がするように、学術的な読みをしている訳ではありません。それも明らかです。しかし、子細に見てみれば、バタイユによるヘーゲルの極めて正確な借用が、そのようなありとあらゆる操作があるのも事実です。もちろん、ある部分については批判しても良いでしょう。批判を禁じるのが本題ではないのですから。ただし、基本的には、この種の批判は常に、哲学的な言語に自律性があることを自明のこととしており、もし哲学言語という特別な形態を取らないならば、それを拒否するのだと思います。その点について、私は全く同意できません。まさしくそれぞれのケースにおいて観察する必要があると思います。アプリオリに判断を下すことはできません。それは私には明らかです。アプリオリに判断することはできず、アプリオリに決定することもできません。バタイユが語ったこと、それはヘーゲルに近いものではありません。なぜなら、それは不条理だからです。さらに、それは、ヘーゲルについて人が抱くであろう考えとは既に対照的です。もちろんです。一方で、ヘーゲルのテキストそれ自体が、たぶん矛盾に満ちているのだということがよく分かるのです。つまり、そういった問題が、この問題の根っこにあるのです。

細貝 現在、多くのヘーゲル専門家が、コジューヴ<sup>29)</sup>の著作を批判して、彼がヘーゲルを曲解したと言っていますね。

レイ 彼がヘーゲルを曲解したと言うのは明らかに性急にすぎるでしょうね。しかし彼が解釈を行ったことは確かですし、あらゆるヘーゲル読解がひとつの解釈であること、それは明らかです。さて、コジューヴの解釈には、もちろん特異なところがありますが、けれども同時に、それと比べるとコジューヴのテキストがまがい物となるようなヘーゲルの真理がどこかに書き留められているわけでもないのです。勿論、コジューヴのもひとつの解釈ですが、そもそも多くのものを含んだ解釈であり、それもまたはっきりしています。さらにそれは一貫性のある一つの解釈なのです。彼の解釈は一貫性のないものではなく、まさにその反対です。結局、ヘーゲルと比較して彼の解釈に評価を下すことはできますが、それと比べたら不純となるようなものがあるわけでもなく、全き純正なるヘーゲルの真理などありません。それは確かなことです。

### 時代を経て何度も読み返すことの意味

細貝 そのような解釈について伺いたいのですが、私自身の本の序文で、あなたはバタイユの著作を部分的にしか入手できなかった頃のことを語っていただきました。その頃になさった読解と比較して、『バタイユ全集』のほとんど全てが出版されたあと、バタイユの全体像に向き合うことで、あなたは以前と異なる印象を抱きましたか。そして、その差異とはどういったものでしょうか。

レイ それは複雑ですね。私はそんな風に、つまりバタイユを、いわば雑然とした状態のなかに発見したのであります。あなたや、あなたと同世代の人々は、いまやバタイユの全体を読むこと

ができます。ただひとつの問題は、私がバタイユを少しずつ発見していったことにあります。それゆえに、視点を変え、読み返さねばならず、そのようなものと思ひ込んでいた可能性のある解釈を解体していきました。そのような意味で、少しずつ知ることは、とても健全な姿勢なのです。同時に、それはまた次のような問いを提起します。すなわち「全集とはいったい何なのか」という問いです。それは学術的なものでない、真の問いなのです。「全集とは何か、編纂の問題とは別の次元で、それは本質的にどのように構成されるのか」という問いです。いずれにせよ、全集は、バタイユのエクリチュールの中に、異なる地層、異なる時間性、異なる興味があることを示します。そして、その問いは様々な解釈に対して、以前よりもはるかに慎重であることを強いるのです。私がバタイユについて興味を持ち始めたとき、もちろん、自由に手に入るあらゆるこうした材料、これらのあらゆるテキストはありませんでした。したがって、全集とは、読み解く者にいっそう慎重であることを強いるのですが、だからといって解釈ができないということではなく、慎重でなくてはならないのは、そこに全ての歩みがあるからです。つまり、以前にもまして、バタイユをひとつの状況、ひとつの立場に固着させることはできないのです。ですから、問題は、いかにして、そして何をもとにして解釈を行うのか、テキストを考慮に入れるのか否か、またはほとんど考慮にいれないのか、ということです。あらゆる種類の問いが発せられるのですが、それは、実は作品に対する絶え間ない発見の一部をなしているのです。すべての重要な作品に対しても同じことが言え、ニーチェに対しても同じことが言えます。何年にも渡り、『力への意志』が歪曲され続けた歴史がありました。それは、首をかきげたくなるような政治的立場にいる教授たちの協力を得て、ニーチェの妹が編んだ本です。ところが、後にその完全版が製作される課程で、それがニーチェにとっては非常に漠然とした計画であったこと、よって、それは明らかに1冊の本ではなかったことが分かってきたのです。したがって、諸事実を見直し、それらを他のやり方で再読しなくてはならなくなりました。このように、絶えず読み返さねばならない作品があるのです。

**細貝** その通りだと思います。例えば、ジョルジュ・バタイユの小説や物語がプレイヤード版で出版されました。個人的に、私はガリマール版『バタイユ全集』と比べて非常に異なる印象もっています。

**レイ** そうですね。それぞれの版に、非常に強固な意図があるのは明らかです。そして読解は、少なくとも部分的に、そうした意図によって導かれます。解釈によって、少なくとも時々は、それを明らかにできるのです。

**細貝** あなたがジョルジュ・バタイユの『内的体験』しか所有していない頃、つまり60年代において、あなたはどのような感じの読解を行っていたのですか。

**レイ** 解決のつかない読解です、他に何と言えはいいのでしょうか。解決のつかない読解、好奇心に溢れた、語の本来の意味で好奇心に溢れた、そして系統立っていない読解です。

**細貝** バタイユについてどのような印象をもっていたらっしゃいましたか。

**レイ** それは複雑でしたね、無邪気にバタイユを読む人はいませんから。おそらく59年か60年に私は『内的体験』を読んだはずですが、もう分かりません。そこには中心的な形としてサルトルの思想がありました。サルトルなどから派生した、ある種の実存主義でした。結局のところ、たとえサルトル主義者でなくとも——私の場合はそうではありませんでした。私は自分がメル

ロ＝ポンティにより近いと感じていました——、そういう雰囲気蔓延してました。それで、他の人々がまたそうするように、私も一種のサルトル的な格子を用いてそれを読む傾向がありました。そして、それを読んだとき、同じような「感覚」を持ったのです。そして、ほぼ同時期、1961年に、レヴィナスの最初期の大変短いテキストが出ます。『実存から実存者へ』を初めて読みながら、サルトルの思想と極めて似通った思想が語られているという印象をもちました。「イリヤ」までに至る展開が、です。そのため、こう言ってよければ、人はその時代の中で作り上げられるもの、強い影響力をもつものによって、知らず知らず影響を受けているのだと思います。

細貝　すでに存在しているものによってですね。

レイ　ええ、すでに存在しているものによってです。たとえそのことに気づかず、後になってもなかなか気づかないとしても、既にあるものに影響を受けているのです。研究とはそういうものです。そして自分がどのような状況にあるのか気づくのは難しいのです。いずれにせよ、そうしたあらゆることを考慮に入れ、それを別のやり方で読み返すことが必要であり、それこそが、確かにバタイユに関して行われてきたことではあるのですが、同時に、レヴィナスやその他のことに関してもまた行われてきたことでもあるのです。それは明らかです。したがって、私が思うに、関心のある全ての作品に対しては、絶えずそうするのではないにしても、少なくとも定期的に再読することが実際に不可欠なのであり、それを通じて自らを育み、自らを形成したものを再読する必要があるのです。何故なら、最初にそこに向けられたまなざしは、読み取りえたものに応じて変化するのですから。同様に、これはまた別の問題なのですが、60年代に私がヴァルター・ベンヤミンの初期テキストの翻訳を読んだときのことです。同じ問題ではありませんが、どうすればよいかまったく分からないような、テキストのとらえ方についての問題がありました。私は、それが重要なことであり、非常に重要な何かであるとすら感じていたのですが、もしそれについて説明するよう求められたとしても、お分かりのように、私はそうすることができなかつたでしょう。そうです。それにも時間が必要なのです。そのうえ、それはドイツ語に、難解で、まずまずのフランス語に翻訳されたドイツ語に関わるものでしたから。よって、それ自体として難しくはないが、どこに分類し整理したら良いか、何に対してそれらを位置づけたら良いかがよく分からないが故に難しいものがあり、それをとらえるのに一定の時間も必要なのです。そして、それはバタイユやレヴィナスに関してもあてはまり、今言ったような必要があるのです。私は大変早い時期に読んだのですが、それは私が名前を知っていたからであり、60年から61年の間には全く知られていなかったのです。哲学の学生の間でさえ、レヴィナスについて話す人たちはごくわずかしかなかったといえます。私は2冊の薄い本を購入したのですが、それは『実存の発見—フッサールとハイデガーと共に』と『実存から実存者へ』でした。確か1960年だったと思いますが、私はソルボンヌの広場にある哲学書の店でこれらの書籍を購入しました。一方でそれは、明らかにまったくの別物でした。私はそれがサルトルの分析の延長であるという印象をわずかにもちましたが、それは文体において、また少々抽象的な現象学的一种であるという点で類似していたのです。私は、そこにまったく別のものがあることを理解するのに時間がかかりました。ですから、結局、自分に密接に関わるものを定期的に読み返すという経験が必要なのです。もちろん蔵書全てをではなく、自分に強く

関わるものをです。

### サルトルの愚かさについて

細貝 サルトルについてお話していただきましたが、サルトルはバタイユを理解しようとするために、非常に重要な一例でした。彼は「新しい神秘家」という題名の論文のなかで、この頃にはまったく読まれていなかったバタイユを敢えて批判しようとした。

レイ ええ、まったくそのとおりです。それもまた同じことに帰着します。すなわち、サルトルは50年代から60年代の初めに至るまで、非常に強固で覇権的な地位を有しており、彼こそがフランスの知識人の舞台に君臨していたことをよく示しています。おそらく、そうしたことが多くの人々にバタイユを読むことを躊躇させていたのは確かなことです。したがって、そうした状況乗り越えなければならなかったものであり、実際、サルトルの方に——とはいえ、それはサルトルにあって唯一の例ではありませんが——バタイユに対するある種の大変な無理解がありました。それにしても、文学についてのサルトルの初期の論文は唾然とするほどに愚かなものでした。それはブランショやモーリヤックについて書かれたものでしたが、ひどいものでした。<sup>30)</sup> その哲学者は、まるで全てを既に理解しているかのように振舞い、彼が用いるいくつかの決まり切った言い回し——私はそれについて何年か前に1本の論文を書きました——は、理解や解釈を試みようとするよりも、むしろともかく相手をやっつけてしまおうとするものです。それはひどいものでした。彼の文学についての44年から45年にかけての論文はあきれるほどひどいものでした。しかし、サルトルは知識人の舞台に君臨していたのです。

細貝 その頃のサルトルが有していた社会的地位に鑑みれば、彼はバタイユのようにほとんど知られていない作家を批判せずともよかったのではないのでしょうか。

レイ ええ、そうですね。そこには、ある哲学者の、いずれにせよある哲学の、覇権主義的な側面がまさにうかがえます。それは哲学全体のというわけではなく、そのようにいくつかの決まった言い回しで作家の真理を言い当てる資格が自分にあると思込んでいるある哲学の性質なのです。こう言ってよければ、まさにそれら全てに対するアンチテーゼがデリダであり、デリダの仕事であるのは明らかです。そういうわけで、私はデリダの仕事をすぐに再認識し始めたのです。というのも、それは文学についてのサルトルの勿体ぶった言い回し——敢えて言いますが、私にはそれがいつも愚かしく思えました——に対して、実のところ本質的であると思えたからでした。ただし、サルトルの『存在と無』に対しては、私は一定の評価をしていました。しかし、文学についての論文は、私には相変わらず大変な愚行に見えました。ただし、取るに足らない愚かしさではなく、文学経験を安易に包括し、それをやたらに単純化した言説で説明しようとする哲学的な意志の愚かしさでした。

細貝 では、それこそが、当時はマイナーであったバタイユをサルトルが批判しようとし、敢えて批判した理由ではないのでしょうか。サルトルは、思想的に、バタイユに対して何らかの近さを、そのような何らかを見出していたのだと私は思います。

レイ おそらくそうでしょう。この当時、サルトルには、およそ自分でも気付いていないライバ

ル意識がありました。

細貝 『自我の超越』のなかで、サルトルはバタイユとほとんど同様のことを述べていました。

レイ ええ、しかし言い方を変えれば、全く別のことになります。おそらくある種の近さはありました。とはいえ、大きな相違点もあります。時には、ちょっとした言葉や、ちょっとしたニュアンスで全てが変わってしまうこともあります。バタイユはサルトルの心を普通より少しだけ動かしました。というのも、実際、彼は同じようなところに近づけたのですから。しかし、サルトルはそれに加え、先に言ったように、文学についての真理を述べるという覇権主義的な意志をもっていました。それは確かです。しかも最小の手数で、つまり、本当にちょっとした紋切り型の言い回しで。モーリヤックについての論文、ブランショや当時の他の複数の作家についての彼の論文は粗悪なものです。それを擁護すべき点は何もありません。『文学とは何か』は言語道断の観点から書かれています。それは愚行ですが、サルトルの愚かさではない愚行です。サルトルが愚かなのではありません。それだけは言えます。哲学についてのある考え方からくる愚かさ、つまり、哲学は起こること全てについて真理を言い当てねばならないという考えの愚かさなのです。

細貝 サルトルは文学の役割を過小評価していたのでしょうか。

レイ 過小評価していたのではまったくないのです。彼は、哲学が文学に対して特権をもっており、哲学は文学を、ほんのわずかな言葉で、いくつかのフレーズで言い表すことができると考えていました。それは文学について語る必要がないからではなく、言ってみれば……。例えば信じられないようなフレーズがあります。彼は「モーリヤック氏は小説家ではない」と述べたのです。フランソワ・モーリヤックの小説が好みでないことはあり得ますが、誓ってモーリヤックは真の作家です。彼が「モーリヤック氏は作家ではない」と述べることは、まさに馬鹿げたことであり、不作法なことです。

細貝 彼はどんな作家をも取り逃がしたくはなかったのでしょうか。

レイ 彼が何をしたかったのかはよく分かりません。私があなたに言えることは、そうしたことがそのとき起こったということだけです。ご存知のように、サルトルがそれを執筆した45年から46年にかけて、彼はまさに栄光の頂点にいました。当時のサルトルは、フランスの「大作家」です。言わば、世界的な知名度すらありました。それゆえ、彼は数多くのことをする権利がありました。ちょっとしたフレーズで、彼は裁き、一刀両断にするのです。それはまるで、文学の重要な部分を、その無意味さを示し、その無益さを強調することで取り除かねばならないかのようです。それが、文学や言語を対象とした戦後のこれらのテキストを通じて、サルトルが実行した奇妙な作業なのです。

細貝 バタイユの専門家の中には、過ぎるほどにバタイユの側に立ち、サルトルはそれほどまでにバタイユにこだわっていたと主張する人もいます。

レイ それはまさに「新しい神秘家」という論文において展開される理性についての考えのことです。つまり、理性というものがあり、私すなわちサルトルは、理性が何であるか、その限界がどこにあるかを知っている、よって、この作家について彼が神秘主義に陥っていると言っていることができる、とこういうわけです。よって、哲学者である私が、どこへ通じているのか知りつつ引いている確固とした分岐線のようなものがあるのです。私は図式的に述べていますが、こ

のレベルの話なのです。そこには、幾つかの特別な理由により、何か愚かしいものが表れています。愚かなのはサルトルではなく、この当時に彼がこちらをまごつかせるほどの確信をもって展開している思考様式の方です。この当時のサルトルの思想展開においては、ほとんど問題を提起するものがありません。それに対してメルロ＝ポンティにおいては、多くの、そして重要な諸問題があり、それは今日でもなお反響を呼びうるものです。

### 贈与と信用（取引）

細貝 博士論文の審査委員としてあなたが参加されたとき、あなたは私の人類学に対する無関心を指摘されました。ですが、あなたはモース<sup>31)</sup>に関して、人類学について直接言及するのを控えていらっしゃるように見えます。モースに関していえば、あなたのニーチェに対して行った批判の方向で読むことができるのではないですか。例えば、モースが用いるあらゆるテクニカルタームは、記号として、象徴として考えられていました。バタイユは幾つかの語彙を取り出し、それを記号として解釈しました。例えば供儀やポトラッチなどです。あなたは、そのような仕方でもースを読むやり方に関心をお持ちですよ。

レイ そのとおりです。お分かりのように、それは重要なことだと思います。ただその点について研究してこなかったというだけです。それは私が自身に投じた問いだったのであり、あなたへの反論だったのでは全くありません。私は特別に研究したわけではありませんが、人類学、それも他でもないモースの人類学と、これまた他でもない幾つかの用語とを調和させることの中に、重要な主題がいくつも存在すると思います。単純に言えば、投じられ得る問いは明らかです。つまりそれは「それらの借用はどのような取り決めでなされているのか」、「それは何をもたらすのか」という問いです。言ってみれば、それだけです。しかし、この問いが重要であることは確かであり、それはバタイユが絶えず行っていることです。それは明白です。ですから、それについての問いを投じるのには、なおのこと意味があるのです。

細貝 私がこうした問いを投じたのは、信用（取引）についてのあなたのお考えが、贈与についての同じような考えに基づいていると思うからです。

レイ ええ、もちろんそれはそんなにかけ離れたことではありません。とはいえ、贈与については、もっとずっと思索が深まっていた。

細貝 贈与についての彼の論理は、まったく別のものによって導かれているというわけですね。

レイ その通りです。それをこれから言おうとしていました。それはまったく別のものです。別の問題であり、同じようなことではありません。信用（取引）というこの言葉もまた、ある領域において意味をもつ言葉ではありますが、隠喩化され、再定義されたもの、再定義され得るものであると私は見えています。これで少しはあなたの質問に対する答えになるでしょうか。

## 単独の経験をそのたびごとに問い直すこと

細貝 次が最後の質問です。あなたは、アンブロジーノによって率いられたグループ以外に、バタイユの活動の影響下で、あるいはバタイユの活動の挫折のもとで形成されたグループに出会ったことがありますか。

レイ いいえ。たった一度だけ出会ったものが、あなたにお話ししたものであり、それも全くの偶然のなせる業でした。それは、哲学とも、バタイユ——その導きで私はこのグループに関わることになったのですが——とも何の関係もないある人物のおかげです。

細貝 私があなたにこのような質問をしたのは……。日本で90年代に起こったある出来事をあなたにご存知かどうか分かりませんが、オウムという名のひとつのグループがあり、それは仏教の強い影響下で、チベット人たちが体験したことを実践しようとし、ついにはサリンを撒くに至りました。

レイ はい、そうですね、いま思い出しました。ええ、はっきりと。東京の地下鉄で起こったことです。

細貝 つまり、確かに、オウムは宗教を生きたのです。つまり、宗教とは……。

レイ それも宗教についてのひとつの解釈です、少なくとも……。

細貝 非常に暴力的な、宗教についてのひとつの解釈です。アセファルの活動とオウムはどこまで類似しているのでしょうか。

レイ その点に関して意見を述べることは、私にとって難しいことです。私はこのオウムというグループについてまったく知らないのですから。

細貝 それについてこのように述べることは少々極端でしょうか。

レイ おそらく。とはいえ、私はまったく知らないのですから、あなたの質問に少しでもはっきりと答えることはできないと思います。

細貝 こうしたグループは世界各地に時折現れて来ます。そこで私が知りたいのは、アセファル以後、フランスにおいて同じような集団的な活動が存在していたのかどうかということです。

レイ 存在していたとは思いません。おそらくですが、よく分かりません。私はそう思わないのです。私は同じようなものを目にしていないと思います。アセファルとは、人々の結集であり、一群の作品の帰結であり、また、人類学や聖なるものの問題に結ばれており、ご存知のように、それは一義的なものではないのですから。したがって、アセファルをこれこれのものに還元することはできないのですが、アセファルが結局のところ、極めて特殊な時期に結びつけられていることは確かですし、それは明らかであると思います。いずれにせよ、私には分かりません。アセファルのこうした多義的な側面を軽視しないこともまた必要だと思います。それはきっと、全く別の方向へと向かう何かです。それを単一の方向へだけ還元することはできません。それははっきりしています。

細貝 それでもやはり、ある時バタイユがアセファルというグループを結成した要因のひとつは、供犠そのものを実行するためでした。

レイ ええ、そうですね、そう考えられています。しかし、あなたがおっしゃったように、「供犠」という語はバタイユによってあまりに変質させられているので、それが特に何を意味するのかもまた分からないのです。お分かりのように、それが謎であり、とにかく謎の一部なのです。

細貝 ある時、彼は宗教団体を結成しようとしていました。

レイ ええ、おそらくは。とはいえ、そうであれば、宗教に関するバタイユの主要なテキストを再検討しなければならなくなるでしょうし、ある特定の時期における宗教にたいする彼の考えや、彼のキリスト教との関わり——それも明らかに単純なものではありません——を検討しなければならなくなるでしょう。そこでも、「彼は反キリスト者だ」とか「彼はキリスト者だ」と述べるだけで満足してはなりません。そのような言表は何も意味しません。どちらも何も述べていません。テキストには揺らぎがあるのです。そしてそのとき、テキストの扱い方に注意しなければなりません。バタイユの立場をある特定の時期に固定させることはできないのです。

細貝 運動に実践的に参与する知識人たちの態度についてどうお考えですか。

レイ 正確に言えば何の運動に、ですか。

細貝 宗教を成立・設立させようとしたアセファルの運動のような実践的な活動に、です。例えば、自らの思想を実践しようと試みた三島由紀夫のような活動についてです。

レイ 分かりません。それは難しい質問ですね。というのは、そのような種類の経験同士を関連づけることはできないと思うからです。それらはそのたびごとに単独の経験なのです。したがって、このような諸経験をひとつにまとめるようなことはできないのです。それが第一に言えることです。加えて、言語の問題があります。つまり、原語で読んでいるのではない文学テキストについて何か言うことは非常に難しいことだと思います。第二に言えることは、そのような領域にある何かの周囲に、いかにしてひとつのグループが形成されるのかを理解するのもまた難しいということです。何かと私は言いましたが、それが何であるか正確には分からないからです。そして、結局、それについて外側から何が分かるのでしょうか。というのも、アセファルについて分かっていることは、それでも僅かで、ある人たちや他の人たちについて、あるいは出版されたテキストについては何か言うことができます。しかし、それ以外は噂に過ぎません。供犠についての物語も噂です。いつそのような噂が生まれたのか、私には分かりません。しかし噂を流したのは、極端なことを言えば、おそらく彼らなのです。私には分かりません。全く分かりませんが、たとえばそんなふうにも考えられるということです。

細貝 ニーチェの思想、そして仏教の思想にも多くの危険な側面があります。大学という枠内でそれらを扱うときには、このような側面をほかそうとします。

レイ もちろん、危険な側面はあります。しかし、問題は都度現れます。そうであるからこそ、そのような側面をその都度真摯に扱わねばならないのです。そのたびに問うこと、それは理解しようとすることです。そこにこそ解釈が不可欠ですが、もちろん常にそれは危険と隣り合わせです。それは、問題が正しくは何に呼応しているのか、問題がどの程度リアリティを帯びているのか、思想家が、任意の瞬間に、ある言葉を通じて何を残し得たのか、などを知らうとすることなのです。もちろん、バタイユを批判してそう言うのではありませんが、捉え得るものの彼方まで行くことのできる言葉の力もまた存在するのです。アセファルの物語の

中には、虚構もまたあるのかもしれませんが。私には分かりませんが、私はそこにも問いを投ずるのです。虚構の部分もあり得るでしょう。もちろんです。だからといってバタイユのある部分と矛盾するということでもないでしょう。ですから、アセファルに対して、過度のリアリティを付与する必要はないのです。というのも、単に何も分かっているわけではないのですから。そして、この種の謎がこのような物語の周りで保たれるのは、おそらくそれが虚構と現実を混ぜ合わせ、言表と夢想——ただし、語の肯定的な意味での夢想です——を混ぜ合わせるからでしょう。私はそのような事例についてお話していますが、他の例については良く知りません。いずれにせよ、アセファルには、おそらく危険なものとの対峙があったと言っても良いのは明らかです。同時に、それについて語ることでできることは極めて限られていると言わねばなりません。というのも、そうでなければ、何を言ってもいいことになります。たぶんそこで行われていたと想定できるのは、幾つかのテキスト、おそらく幾つかの虚構——私が夢想と呼ぶもの——を混ぜ合わせることで、すなわち、何かへと投影すること、宗教的なもの——ただし、全く異質な宗教です——に由来する、ある様態をもった何かへとなぞらえることです。ただし、少なくとも、いま仰ったケースは難しいですね。私の全く分からない、あるいは、ごくごく外形だけしか分からない三島のケースについては語ることはできません。こういうときには、そうしたことがらに対して、それらが現実であるという保証を単純には与えがたいのです。というのも、そうすると、どうとでも解釈できてしまうからです。明らかに何の保証もないのです。そして、それが有り得るわけもないのです。これが私の立場と言えるでしょうか。

細貝 有難うございます。

レイ ええ、たくさん話しましたね。

#### 注

- 1) 近著に、『タブローとページ *Le Tableau et la page*』（1997年）、『信用の時間 *Le Temps du crédit*』（2002年）、『作品の約束 *La Promesse de l'œuvre*』（2003年）、『聖パウロまたは両義性 *Paul ou les ambiguïtés*』（2009年）、『不安な時代での忘却 *L'Oubli dans les temps troublés*』（2010年）などがある。
- 2) 1912年生まれのフランスの原子物理学者。モリス・ド・プログラの研究所所長を務めた。バタイユと親交深く、政治的・秘密結社「コントロール＝アタック」や宗教的・秘密結社「アセファル」の中心的役割を演じた。
- 3) アルザス出身のジャーナリスト。大学人ではなく、むしろ意図的にそこから身を引き離していた。ニーチェの著作のフランス語訳はアンリ・アルベールにより、1898年から1909年まで、メルキユール・ド・フランス社から刊行された。彼の翻訳は、レイ氏も指摘する通り、極めて文学的であり、ニーチェを大学の専門職哲学者としてではなく、思想家や作家として紹介するものであった。この翻訳に、当時の専門職哲学者は極めて批判的であったが、ジッドやヴァレリーなどの文学者は惜しみない賞賛を与えた。いずれにせよ、ニーチェのフランス語への初期の翻訳が、彼のようなジャーナリストにより、メルキユール・ド・フランスという文学を扱う出版社から出版されたことは、その後のフランスにおけるニーチェ受容に長らく影響を与えることになる。Jacques Le Rider, *Nietzsche en France*, Paris, PUF, coll. 《Perspectives germaniques》, 1999, p.25-66 参照。
- 4) 1941年生まれの哲学者・精神分析家で、ジャック・ラカンとシルヴィア・バタイユの娘である。夫は精神分析家のジャック＝アラン・ミレル。シルヴィア・バタイユは、旧姓シルヴィア・マクレス、ジョルジュ・バタイユの最初の妻である。シルヴィアは、バタイユと1928年に結婚し、ローランスと

いう娘をもうけたが、バタイユとは1934年に別居し、1938年からは、ラカン（当時こちらも別の女性と結婚していた）と暮らし始める。1941年にラカンとの間にジュディットをもうけるが、1946年までバタイユと婚姻関係を続け、ラカンと実際に結婚するのは1953年である。よって、ジュディットは、少なくとも、1941年から1946年まで、生物学的にはラカンの娘でありながら、法的にはバタイユの娘という状態にあったことになる。レイ氏の証言が正しければ、1960年当時にも、バタイユ姓を名乗っていたことになる。

- 5) ニューヨーク大学教授。バタイユに関する著書多数。ガリマール版バタイユ全集の第1巻、第2巻の編集を担当。
- 6) フランスの作家。画家バルチュスの息子の一人。ガリマール版バタイユ全集の編集者の一人。イヴ・サンローランのジュエリーデザイナー、かつそのミュージズとして世界的に有名だったルル・ド・ラ・ファレーズとの夫としても知られている。
- 7) 1904年生まれ。フランスの画家、挿絵画家。1988年没。ミシェル・レリス、ジョルジュ・バタイユやシュールリアリスト達と親交があった。
- 8) いわゆる「土曜会」という名で呼ばれている集会のことだと考えられる。マリナ・ガレットティによれば、「哲学的性格の非公式集会であり、ピエール・アンドラーは、この会を『社会学研究会』やジャン・ヴァールの『哲学学院』に近いものと見なしていた」らしい（Georges Bataille, *L'Apprenti Sorcier*, textes, lettres et documents (1932-1939), rassemblés, présentés et annotés par Marina Galletti, Paris, Éditions de la Différence, 1999, p.342 邦訳：ジョル・ジュバタイユ、マリナ・ガレットティ編『聖なる陰謀：アセファル資料集』[吉田・江澤・神田・古永・細貝訳]、ちくま学芸文庫、114ページ）。
- 9) 1902年生まれ。スイスの彫刻家。1985年没。アルベルト・ジャコメッティの弟。ディエゴとアルベルトは、パリでアトリエを共有していた。二人の作風は極めて似ている。
- 10) 1898年生まれ。タシムの画家として知られるフランスの画家。1964年没。バタイユの『アレリヤ *L'Alleluiah*』のために挿絵を描いた。
- 11) ルネ・シュノン。フランス国立工芸院で数学の正教授を務めた。バタイユと共に「アセファル」に最後まで留まったメンバーの一人。
- 12) 1912年生まれ。建築家、装飾家、画家。バタイユの関わった「コントロール＝アタック」, 「社会学研究会」, 「アセファル」の活動に深く関わった。
- 13) 1948年生まれ。ローマ第3大学教授。バタイユ、ロジェ・カイヨワ、レミ・ド・グールモンなどを研究。
- 14) 1908年生まれ。フランスの詩人、批評家、作家、劇作家。1944年没。ロジェ・ジルベール＝ルコントらと共に、ブルトンに対抗して「大なる賭け *Le Grand Jeu*」グループを組織し、1928年に雑誌『大なる賭け *Le Grand Jeu*』を創刊する。雑誌は、1930年までに3号が刊行された。
- 15) 1895年生にウクライナに生まれる。幼年時にフランスへ移民する。社会主義運動家、ジャーナリスト、歴史家。フランス共産党を社会党から分党させるのに中心的な役割を果たした。政治的グループ「民主共産主義サークル」を主催し、機関誌『社会批評』を刊行する。そこには、ミシェル・レリス、レイモン・クノー、シモーヌ・ヴェイユ、ジョルジュ・バタイユなどが執筆している。
- 16) 1893年アメリカ生まれ。夫のウージェヌ・ジョラスと共に、シュールリアリズムやダダイズムを扱う芸誌『トランジション *Transition*』を1927年に創刊する。
- 17) 1248年生まれ。中世イタリアの神秘家。1309年没。イタリアのフォーリーニョの裕福な家庭で、主婦として不自由のない暮らしを送っていたが、1285年のある日、聖フランシスコを幻視したことから、決定的な回心をする。その後、母、夫、子供たちの死後、自分の持ち物すべてを売り払い、聖フランシスコの第3会の会員となる。その著作に、自ら多くの神秘体験や脱魂状態についての記述を残す。バタイユが『内的体験』を書き上げる際の、インスピレーションの重要な源泉の一つである。
- 18) 1260年頃の生まれ。中世ドイツの形而上学者、神秘家。パリ大学にて神学のマイスターの称号を受

けた史上3人目のドイツ人である。同大学で二度正教授として講義を行った。その教説ゆえに異端の宣告を受け、著作の刊行・配布が禁止されたにも拘わらず、その思想は後世に受け継がれ、ニコラウス・クザーヌス、ヤーコブ・ペーメ、ヘーゲル、ハイデガーなどの人々の思想形成に大きな影響を与えた。バタイユもその影響を受けた一人と言える。

- 19) 1896年生まれ。フランスの画家。1920-50年代にシュールレアリスム運動に参加。自動書記デッサンや、砂の絵画で知られるが、「アセファル」のデッサンを書いたことでも広く知られている。
- 20) 1930年生まれ。フランスの作家。雑誌『テル・ケル』の編集に関わっていた。
- 21) 1918年生まれ。当時の「前衛」芸術家達の交差点にあり、「テル・ケル」の人々以外にも、ピエール・ギュヨタ、ピエール・ブーレーズ、ジャック・デリダ・ジャン・ジュネなどと親交を結ぶ。特にアルトールとの結びつきが強く、アルトールの遺著管理人となり、ガリマール社から刊行中の『アルトール全集』の編者を務める。
- 22) 1937年生まれ。フランスの作家、詩人。1962-1973年の間、雑誌『テル・ケル』の編集者を務める。
- 23) 1924年、ストラスブールで、ロシアからの移民の家庭に生まれる。精神科医、精神分析家。
- 24) マルグリット (Marguerite Aucouturier) のことだと思われる。
- 25) 1932年、カナダ、モントリオール生まれの精神科医、精神分析家。パリで活動。精神分析高等学術研究院をパリに創立し、運営している。
- 26) 1925年生まれ。ハンガリー出身の精神科医。
- 27) 1803年生まれ。フランスの歴史家、随筆家。パスカル、モンテーニュ、ルソーなどのように、ジャンルに括るのが難しい作家の一人。叙事詩、劇、文学批評、時事批評など様々なスタイルで歴史を叙述した。ちなみに、レイ氏がここで、彼が後書きを付けたと言及している本は『フランス史の哲学 *Philosophie de l'histoire de France*』(Payot, 2009) である。
- 28) ジュール・ミシュレ。1798年生まれ。フランス近代歴史学の基礎を築いた歴史家。その経歴は、高等師範学校の歴史学教授、国立古文書館の歴史部長、コレージュ・ド・フランスの教授を歴任するという、極めて輝かしいものであった。その生涯の作品である『フランス史』により、フランスの民衆にとっての「国民の歴史」を創設し、幾つかの神話的イメージを国民的記憶として定着させることに成功した。今日人々が思い描くジャンヌ・ダルクやフランス革命のイメージは、ある程度までミシュレによって創られたと言っても過言ではない。真野倫平、『死の歴史学：シミュレ「フランス史」を読む』、藤原書店、2008年、p.12-24参照。
- 29) アレクサンドル・コジェヴ。1902年モスクワで生まれる。フランスの哲学者。1933年から1939年にかけて、高等学術研究院で、ヘーゲルの『精神現象学』についての講義を行い、その中で全く新しいヘーゲル解釈、実存主義的・マルクス主義的なヘーゲル解釈を展開し、ヘーゲルの思想をフランス現代思想の最前線へと送り出すことに貢献する。講義には、レイモン・クノー、バタイユ、カイヨワ、レリス、ラカンなどが出席していた。
- 30) 1939年、サルトルは「フランソワ・モーリヤック氏と自由」という論文で、モーリヤックの主として『夜の終わり』を取り上げ、作者モーリヤックは、神の視点に立って小説を書いているがゆえに、主人公テレーズの運命を断定してしまい、彼女に自由を与えていない、と批判している。
- 31) マルセル・モース。1872年生まれ。「フランス人類学の父」と称される。その『贈与論』、『供犠論』等はバタイユに大きな影響を与えた。